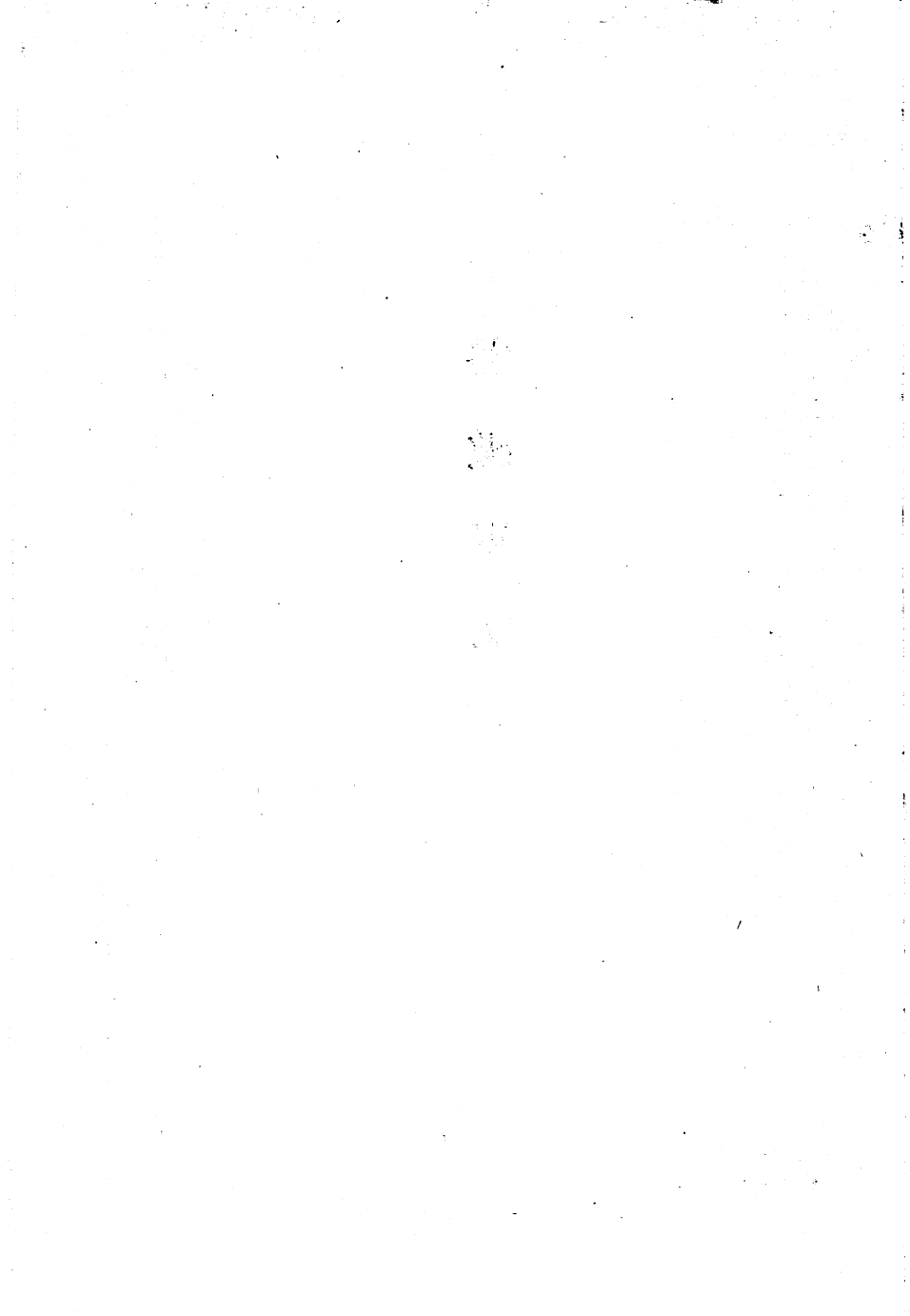


一
谷
嫩
軍
記



一谷嫩軍記

座本 豊竹 越前少掾

摩訶戰克の將は國の爪牙大馬の人を勞る則は帷蓋を以て是を覆ふ。況や大功の人に於てをや重ぜずんばあるべからずと。漢書に見えしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて。奢る平家を討亡し。朝家をやすんじ奉らんと。軍慮をうながす堀川御所 オロシへ日夜に評議。區々なる。地いて其頃ハ壽永三年二月半。卿の君の御父平大納言時忠。愉に須磨の皇居より入來を。儲のフシ上座にすゝめ。詞先づ以て遠路の所御苦勞千萬と。挨拶あればさればく。詞様々術を以て。神聖と八咫の鏡は念なう奪ひ畢せしが。十握の御劍は安徳天皇。晝夜隨身ましませば思ふに任せず。地先づ二種の神寶受取り給へと。フシありければ。地謹んで重拜有る。詞コハ忝き御念志。これ偏に舅君の御働きと。地悦喜の詞に時忠重ねて。詞扱又平家の要害。嶮岨を頼みの地理陣取。地中々容易の事にあらず。則ち繪圖に記せりと取出し手に渡せばフシ逐一細見ある所へ。詞五條の三位俊成卿よりのお使者。只今是へ御出でと。地取次ぐ聲や。長袖の。フシ花の香名のみ。菊の前。櫛姿のつしりと小オクリたばひ。頃なる白菊の露をおびたる如くにてフシおめず。臆せず打通り。地大將の御座近くしとやかに手をつかへ。詞妾は五條の三位が娘菊の前と申す者。父俊成は禁裏にて千載集の役。折から旅人とおぼしき者。此歌を集に加へて給はれと一向願ひ。見れば天晴秀逸と感じながらも。私に加へん事もさだかならず。御伺ひの爲參上と。地入る事計り詞數いはぬ色なる戀人の。短冊御前に指置くもフシをしやくこぼるゝ風情なり。地義經も忠度の詠歌と知れどさあらぬ體。手に取つて吟じらる。詞さど波や。志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな。ハレ香ばしやあてやかや。地何かは苦しかるべきと。賞美の詞を時忠打消し。詞ヤア

其歌集には入れられまじ。罷りならぬと傍若無人。地さゝゆる詞を菊の前。詞イヤ申し時忠様。お聞きの通りあの歌は父俊成も感心し。君も御賞美ましますを集に入れなとおつしやるは。地誤りばし有つての事か。憚ながら今一度吟じかへして御評議あれと。いひも切らせずヤア愚かく。詞ソレ其歌は薩摩守忠度。白髭明神社參の時。志賀にて詠みしは犬打つ童も知る所。元より忠度は俊成が門家。地弟子ひいきに平家へ近寄り。後くらし此使追つかへされよと。フ言ひほぐせば。地菊の前詰寄つて。詞イヤ申し。弟子を鼻頂に平家へ心寄するとは大切なるお詞。それには慥なホ、證據といふは其方と薩摩守。兼てより様子ある事知つてゐる。其縁に俊成が。平家をかばふ所存といふが某が誤りかと。地我も平家でありながら前後揃はぬ詞戯ひ。義經暫しと止め給ひ。詞平家方に縁有りと。一旦不審立つ上は俊成卿迄度と成る。集に入る事かたかるべし。さりながら所存有れば此短冊。義經が預り兎も角もはからはん。地此趣を傳へられよと始終をさすが良將の。風雅の返答尤もと時忠詞を控ゆれば。力及ばず菊の前猶も摺寄り手をつかへ。詞又俊成も此秀歌惜む心に候へば。跡よりよきに御差圖と。地思ひ定めし言の葉も。花に嵐の時忠に。心残してお暇申し。五條の館へ立歸る。フシお次の方より。地武藏國の住人。岡部の六彌太忠澄。熊谷次郎直實參上と。フシ披露を待たず立出て。六彌太御前に手をつかへ。詞頼朝公より御墨付。到來と指出し。西國の軍數日延引に付き再三の御催促。一日も早く御出陣と。地諫と共に次郎直實。詞君御存じられずや。鎌倉には佞臣おほく。義經は平大納言時忠の娘。卿の君に御心を寄せられ。亡慮のかまへなんと頼朝公に讒言申す輩も有りと承り候へば。地時移るは悪しかりなん。急ぎ御出馬然るべしと。フシ詞を揃へ申しける。地大將莞爾と打笑み給ひ。詞ホ、兩人が諫尤もながら。謀を帷幕の内にもぐらし。勝つ事を千里の外に顯はすこそ始終の勝利たるべきなり。義經發向遅なはるは。安徳天皇所持し給ふ三種の寶。都へ返すを妬く思ひ唐土天竺へも渡すか。地若し海底の水屑とならば寶祥の傳へます。日の本はくらやみ。スエとやせんかくやと心を痛め。詞是におはする平大納言時忠は。心惰弱なる御方なれば駟

つて練者と成り。頼むより早驅け入つてこれ見よ。神璽内侍所は我が手に入る。寶劍は安徳帝御身を離させ給はねば。術を以て奪返さん。地要害厳しき平家の備へ。繪圖に畫せて案内を知る。見よ、方々、嶮岨を頼みの油断を見合せ。嶋越より眞下り。詞逆落しに攻入らば。あわてふためく平家の一類。討取るは手裏にありと。地智仁勇備の良將の。軍慮を聞いて諸大名、フシはつと感ずるばかりなり。詞ナウ時忠卿。一旦練を組みし上は別心なき婿舅。天下の爲の謀御心にさへ給ふなど。地怨をなだむる頼智の詞。時忠は默然と指俯向いて、フシ居たりける。地義經重ねて。地ヤア誰かある用意の制札。地はつと答へて高札さげ御前に指置けば。ずつと立つて床の間の。フシ筒に生けたる薄櫻に件の短冊結び付けいかに兩人。詞今度の軍は勅諭の一戦。私の趣意にあらず。六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ。御願ひの此御詠歌千載集には入りしかども。勅諭の御身なれば名を顯はずを憚りて。讀人しれずと記されし趣を演説し。地集に入りたる其印。此短冊を結びたる山櫻を送るべし。詞又熊谷は搦手の。經盛敦盛固めたる須磨の陣所へ打向ひ。若木の櫻を汝が陣屋。義經花に心をこめ。武藏坊辨慶に筆を取らせし高札。此花江南所無也。一枝折盜の輩に於ては。天永紅葉の例に任せ。一枝を伐らば一指を剪るべし。此禁制の心をさとし。地若木の櫻を守護せん者熊谷ならで外になし。其旨屹度心得よと高札は直實。歌は岡部に給ひければはつと兩人領掌し。心を含む禁札の。外を和ぐ和歌の道花をいたはる大將に實あり。色あり情あり。恥ある時忠詞なく不承々に立上れば。コハリ二人の勇士も退出の。底の底意を堀川や。深き恵を汲分けて祝ひ。ことぶく。三眞御代の春。地柳櫻や。松梅も、フシ皆御慈愛に。生茂り。北野の社神々と。小オクリ木の間。くくに打つ幕の。ギン内は男女の色はえて、フシ都ぞ。春の錦なり。地九郎義經の御臺卿の君。幕しぼらせて出て給へば跡に付きく腰元共。申しく姫君様。いつにないそはく、と何を御覽遊ばすと。地尋ねられてさればいなう。詞義經様は此社へ毎日の御詣で。即ち今日が満る日とけさ程より御參詣。地お道迎ひの心にて思ひ立つた此遊山。木々の花より紅葉より早うお顔が見たさにと。夫婦に成つても惚れてゐる。

フシ心は詞に出てにけり。地腰元共も氣をのぼしうはの空目かあれくく。社の方より深編笠立派な若衆供に連れ。當世風のやさ姿お姫様御ろうじやれ。詞よう似たぢやないかいなと。フシいふ間程なく九郎義經。天満神へ日參にけふ百日の満願も。人目を忍ぶ深編笠。熊谷の小次郎を供の丁稚に引連れて。フシしづかに下ましましたせば。地卿の君を迎ひ。詞けさとく參詣遊ばして今頃の御下向は。地定めて道に面白いお心寄があつたてである。さすられなされた此肌を。改めたいと引寄せて。ふと股ふつり。アイタ、。詞何がいたいえま一つと。地つめつた跡の紫はフシゆるしの色と見えにける。地義經も御機嫌よく。詞イヤ是は迷惑。けふは遊山と聞きし故。大内は色所嫁入ぬ先に結ばれた。よしみの人にもお出合かと。地遠慮で態と遅う來たと。もたせ詞に姫君は顔打赤めコレ申し。そんなさもしい濡衣の疑ひ受ける覚えはない。わやくな事と計りにておろく涙に腰元共。詞こりや殿様の皆御無理。何ば程隠しても新枕が證據人。たいそに有つたかなかつたかお心に覚えがある。アレく申しお姫様の穢が上つた。療治して上げなされ。地何ぞで満足なされたら蟲が下ろとむりやりに押遣るもしほ行くもしほ。小次郎來れと打連れて。幕の内にぞ入給ふ。地己が心のだくぼくに人を埋みて平山の武者所。荷擔の人と出合の約束。かたへに打ちし幕の紋目覚えの若荷巴。あほうな事を企て、我身を知らぬ平時忠。跡に續いて梶原平次幕より立出て小手招き一つ所へ寄り集ひ。武者所時忠に打向ひ。詞先達で景高を以て御願ひ申上げたる。彼經盛へ遣はされし玉織姫。呼戻して某が妻にせよとの御事。則ち今日此所で婿舅の結びの盃外に御相談の義もありと景高の内意によつて。是迄推參仕ると。地探抄すれば打領き。詞ホ、貴殿を婿に取れば此時忠も大慶其仔細は。義經が邪智に誇り。三種の神器を奪はん爲卿の君を望みしを。何心なく縁を組み。神寶をふかくと渡したる今の後悔。義經は末々迄我と同意の者にあらず。何とぞ姫を取返し是なる平次景高。相婿二人都の守護に据ゑおかば。地蔡廷は我が心の儘。此上もなき悦びと言ふに平次はしやゝり出て。詞ノウ武者所。貴殿も我も娘達を女房に貰うて有りながら。卿の君は義經が館に居らる。玉織姫は經盛が西國

へ連下れば。兩方ながらおも長な談合。サア其事を此平山も色々工夫してゐると。地案じに時忠打笑ひ。詞ハ、アいや其義は何より易い事。經盛と某頃日不中になりたれば。娘を戻せと言ひやらば縁切つて戻すは治定。又卿の君が事け。地コレかうくと囁けば平次聞くよりぞくく踊り。詞ハ、ア奪取れとはお智恵く。幸ひ今日も此所へ參詣と聞きし間。首尾を窺ひ奪取らん。扱此上は義經を亡す術が肝要々々。地幕の内にて熟談申さん。いざと三人立上り。詞サア平山殿お出てなされ。アいやく貴様は姉婿マアお出で。イヤ先づ舅殿から御入りあれと。俄に舅婿呼ばはり。水の月取る猿松ども。フシ伴ひてこそ入りにけれ。地こなたの幕より小次郎は勢ひ込んで驅出すを。待てと一聲かけながら義經立出で。詞ヤアく小次郎。けしからぬ勢ひにて何處へ行くやと宣へば。君しろしめされずや。此前にて三人が最前よりの相談。末々君の仇するやつばらかたつばし打殺し。禍ひの根を拂はんと又かけ行くをヤレ早まるなど引留め。汝より義經が始終の様子は知つたれども。軍を出さぬ其内に。一人でも味方の勢討取るは不吉々々。又某を亡さんと彼等がいかが程もがいても。燈心で磐石及ばぬ事。構はずとも捨置けと。地さも大様に宣ふ中。幕の女中聲に。詞なう悲しや卿の君様御自害遊ばしたと。地叫ぶに義經小次郎も驚きさきわき驅着くれば。御痛はしや卿の君劍に伏して事切れ給ひ。枕に残る一通有り。こは訝しと押披き見給へば。筆の運びも定まらず讀むも哀れの文のあや。詞誠に御館へ入りしより幾千代迄も末かけて。御情を受け參らせんと悦びも仇夢となる。地我が親の悪心と見るより心附にも。聞えを憚りとくくと繰返し讀終り。詞ハツエ是非もなし。親の悪事に心を苦しめ。世を見限りしか残念や。死なずとも濟むべきに。さすが女の細き心。地傍に居ながら別れにも我が身を恥ぢて詞さへ。交さず果てしか不便や。短き契りて有りしよとや。御涙にくれ給へば。悲しさまさる腰元共。血氣にはやる小次郎も。フシ俱に涙にくれ居たる。地暫く有つて御大將屹度思案をめぐらし給ひ。小次郎來よと耳に口。コレナかうくとつどくと言含めよく計へとばかりにて。編笠に人目を忍び。フシ館に歸らせ給ひける。地直家は差心得邊を見廻し。詞卿の君の御立ちなり

と高聲たかこゑに呼ばれば。地かたへの暮には平山梶原スハよき首尾と夕暮時。頬かぶりに顔かくし家來に囁き顔き合ひ手ぐすね引いてヲシ待つ所へ。地腰元婢はした付隨し御乗物を先に立て。小次郎跡に引添うて歩み來るを見るよりも。此處こゝ彼處こゝよりむら／＼と走寄つて乗物を。奪ひ捕らんとおつ取巻く。詞小次郎すかさず身構し。ヤア慮外なるうぢ蟲めら。忝かたじけなくくも義經公の御臺卿の君の御乗物。狼藉ろうじやくを働いて後悔すなときめ付くる。ヲ、サ／＼卿の君知つてゐる。四の五のなしに渡さぬと其前髪首さらへ落すと罵れば。地小次郎は耐たね兼ね引抜いて切りかゝるを。こなたも拔連れ渡り合ひ。切結ぶ太刀かげに。女中は残らず逃散にげつて。直家ちか一人多勢を相手受けつ流して戦へども。さすが小腕の言ひがひなく。やう／＼其場まを切抜けてヲシ乗物捨置き逃歸にげる。詞サアもうよいわ長追すな。地いてまあ早う戀人のお顔を見んと平次景高。乗物の戸を明けて斯くと見るより恟おどろりし。詞ア、こりや死んでゐるわ。地ヤア／＼やあと時忠も。平山諸共指覗さしぞき。驚おどろく中にも時忠は添へたる一通こりや何ぢやと。披ひき見るより又仰天。詞ヤア扱あは最前から相談した。様子を知つての自害と見えた。ハア。地はつとばかり差俯向き。ステテ塗方にくれて居たりける。地景高はくつたく顔。詞エ、埒あもない。是はまあどうせうぞいなう平山殿。サアどうというたらどうせうぞい。申し時忠卿御思案はござりませぬか。ハテ思案しあんというてどうせうぞい。得心こころで死んだればねだりにもやられまいし。此儘このままで葬禮まうらひせう。婿の役に景高。供をして焼香やうこうめされ。ハイ。いやこれ末重殿も相婿あひむすめ。葬まうらひに立たずにや居られまい。サア／＼ござれと。地誘いはれて平山は不承々々のヲシ佛頂面ぶつとうめん。地時忠は涙ながら。詞平山景高。遠路はな墓所はら迄御出て御苦勞千萬と。地禮狀文句を口上でのべの送りの營かみみと打連れ。てこそ。三眞露時雨。地故郷ふるさとを焼野が原と。見返りて。修理大夫經盛卿一門の人々と。俱ともに都みやこを落汐おちしほの搦手かみを固めんと。福原にとゞまりて。手配てはり何や萱よやの御所しばし。假居かりの事築きき中に養子の玉織姫。軍の事も色事も繪えて見たばかり味しらぬ。行儀育ちの器量よし女房達と諸共に。浮世咄うきばなしの跡や先。越中の次郎兵衛盛次が妻の裏葉うらば。ひそ／＼聲こゑにて申し皆様。詞此亂こののない先から姫君と敦盛様。訃いひ察ちがはつかりて御祝言の遅いの

は。地どうした事と尋ねれば。忠清が妻の楨の尾。詞サアじたい御姫様がおぼこで。しかけを待つてござる故いつ迄も埒が明かぬ。ちよびくさ咄もしかけたり。人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり。御祝言のない先に。内證の祝言は濟むやうにせにや。姫ごぜは立つ物ぢやないわいなと。地なぶれば姫は眞請にして。ほんにとうからさうしたらつい夫婦になられう物。それ知らなんだそしてまあ。寝てから何といはうやと。袖打掩ふ其風情。葉の裏に咲く玉椿色を含みてかはゆらし。地取次の侍罷り出で。調時忠卿よりのお使者。大館玄番殿御出でと。地知らする聲に女房達。ナウ申しお姫様。お里の便殿様へ申上げんと三人は。打連れてこそ入りにけれ。地參議平の經盛卿。時忠の使と聞き一家ながら不平の中。いかなる事が言送ると。御臺諸共立出で給ひ静々と座に直り。調時忠卿の御使者。これへ通せと仰せの内。地頬も形も大館玄番いかつがましく畏り。詞主人時忠申越し候は。先達其元へ遣はし置く玉織姫。未だ敷盛殿と祝言も御座なき事。是以て互の幸ひ。存する旨候へば。御戻し下されよと主人が口上。則ち迎ひの乗物も。用意致し參つたり。地早く姫をお渡しあれと。フシさも横柄のべにける。地經盛卿の詞を待たず御臺所藤の方。姫君に打向ひ。詞ナウ玉織親御から迎ひに來たが。いぬる氣か。いにともないか。地そなたの心次第ぞと。尋ね給へど姫君は。何と返答いは枕。胸もふさがる思ひにて。フシ指俯向いて詞なし。詞ホウ返事のないは。いにたい氣ぢやの。地ア、あぢきないは人心ちひさい時からいつくしみ。手しほにかけ育ても身は身て通るといふが誠。暮れかゝる平家を捨て日の出の源氏に興し給ふ。親御に隨分孝行しやと。スエ涙交りの恨みの詞。經盛卿打消して。詞ハテくどくどと何を繰言。源平と引別れ。互に心よからぬ中娘を戻せとあるこそ幸ひ。コレく玄番。お使者の趣承知致し。則ち娘を返し申すと。立歸つて達すべし。其方迎ひに參りし上は。此方より人に及ばず。早く姫を連歸れと。地仰せにはつと大館玄番。玉織姫の傍に寄り。詞ナウ姫君。何をうぢく隙入り給ふ。時忠のお心は呼戻すと其儘。嫁入の御相談。コレお悦びなされ。其婚殿といふは。平山の武者所末重とて源氏の兵。姉婿の義經殿と肩をならべる

大大名。あやかり者とはお前の事。サア〜 地早う乗物にお乗りなされと立寄る中。姫はとかうの答なくすつと寄つて支番が刀。抜く手も見せず切付くれば。肩先ずつぱと切込まれ是はと寄るを又一太刀。うんとつけに倒るゝを。飛掛かつてフシとどめの刀。地さしもの經盛仰天に。藤の方は走寄り。詞ヲ、玉織。歴々の武士も及ばぬ手際心の健氣。サア〜 地こちへとフシ誘ひて。地女心のはしたなう。いうて今さら恥しい。詞其心を見る上は。ナウ申し。地ヲ、成程と御夫婦は點頭き合うて藤の方。詞コレ玉織。そなたに見せる事がある。地待つて居や〜と言捨て一間に入り給ふ。地無官の太夫敦盛は父と一所に出陣の。用意とり〜なる中に。母の知せに奥の間より御用いかにと出て給へば。跡より御臺女房逢鏡子土器携へて。ウタヒ君は千代ませ。ナホス地婿君は三國一と祝しける。様子知らねば敦盛は。悔りうろ〜フシあたりを眺めおはすれば。地經盛は取敢へず。詞ナウ敦盛卿玉織姫と婚儀の結び。其盃を取上げられ姫へ差して壽をと。地聞くより染衣打笑ひ。詞申し殿様。御祝言の盃は。姫ごぜより飲初めて。夫へ差すが世上の習ひ。地思召し忘れの様に存じますホ、〜とフシ袖覆へば。地經盛卿打點頭かせ給ひ。詞ホ、女房の盃を夫へ差し。壽を祝ふ下つかたの婚禮は其通り。譯を知らねば不審は尤も。幸ひの折柄なれば語り聞かず事有りと。地いひつゝ立つて敦盛の御手を取り上座に直し。其身は次に座を改め。地口外へ出さねば知る人もあるまじ。詞そも此敦盛卿は。我が子にて我が子にあらず元此御臺藤の方は。法皇に宮仕へ。御寵愛深うして。御胤を身に宿せしが。人の妬の強ければと。先祖平の忠盛へ。白河院より下されし祇園女御の例に任せ。懐胎の身を其儘。某が宿の妻に賜りて出生ありし此敦盛。地我が子として育てしが院參の折ごとに。詞人無き間には妹が子の歌によそへて御尋ね浅からぬ御いつくし。かく由緒ある敦盛なればいかなる高位高官も望の如く成るべけれど。詞官位を受けては臣下の列。重ねて帝位を踐む事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛。まさかの時は春宮にも立て給はん御心やと。觀慮を量り今日迄態と官位の望もせず。地扱こそ無官の大夫と。呼ばせしぞや。詞斯く物語る上からは。其土器は天盃同然。地流を汲ん

て玉織姫三々九度を納むべしと。仰せを菊の。滴したに千代を結びの番蝶つがひ蝶祝ひ納むる姫君の心の内の嬉しさは。フシ早う其日の暮らしたからん。地經盛詞を改めて。詞敦盛卿へ願ひあり都騒動の折柄。法皇御幸の御行方は知らず。御身を残し止めても襲ひ來る源氏の軍兵。憂目や見せ奉らんかと。地心ならず一門と諸共是迄伴ひ申せし事。嘸や跡にて法皇の叡慮苦め給はん勿體なや。詞其上今度の合戦は必定平家滅亡にて。一門残らず討死せば。都へ伴ひ申す人も有るまじ。御身は是より藤の方と。玉織姫を具し給ひ。都は未だ騒しからん。暫く北條峨へ御入りあり。折を見合せ法皇の御殿へ移り給ふべし。地今生の對面も今日限りに經盛。暇乞に御顔ばせ見せもし見もしなざれよと。スエテ涙にくれて宣へば。御臺とかうの詞も涙玉織姫女房達。驚く計りうつとりと。フシ顔見合せて居たりけり。地敦盛大きに恐入り。詞コハ存寄らぬ父の仰せ。生れぬ光から親子と成り。けふ迄御恩を受けし事。須彌蒼海も競べ足らず。縦へ何れの胤ひなにもせよ。後の親こそ親ならめ。東西覺えて今日迄御意を背きし事なけれど。是ばかりは御免あれ。一所に出陣仕り。御馬の先にて。地潔う御恩を送らせ給はれと涙に。くれての御願ひ。地經盛卿押返し。詞一旦の義心尤もなれども。親の恩と。天子の御恩一つに言ふも恐有り。是非御承引なきならば法皇への申譯。某は切腹と面色めんしよく變れば敦盛卿。詞ハ、ア誤り入り奉る。此上は仰せに隨ひ兎も角も仕らん。ム、都へ歸り給はんと。ホ、承引有つて嬉しや。源氏の勢は丹波路と。津の國の街道より二手に寄すると聞及ぶ。地敵の見ぬめの浦傳ひ。難波大江の岸を越え。河内路より上り給へ早う。畏つて敦盛は用意と一間へ入給へば。詞ソレ藤の方玉織も旅の支度を急がれよ。ヤアコリヤ。染衣皆の者。取賄とらなひにいけくと。地仰せに御臺はサア。おぢやと。オクリ皆引へ連れて入給ふ。地經

盛悦喜限りなく。詞サア心安し是からは一の谷へ馳向ひ。地持口を固めんと獨言しておはする所へ。内府宗盛の使として雜兵一人馳來り。經盛卿へ火急の御用と。一通を差出せば何事やらんと押披ひきき。詞何々三草の合戦味方敗北。是に依つて主上を始め門院二位殿。密に讚岐入島の浦へお開き有り。貴殿御船を守護との仰せによつて迎ひの兵船

指遣はず。急ぎ出立有るべき由。地讀みも終らず心せき立ち。詞サア事急なり猶豫ならず。豫て妻子に別れば告ぐる。再び逢ふも互の輪廻りんね。地此儘このままに出行かん案内せよと使を引連れ。急ぎ濱邊はまぎに出給ふ。フシかくとは知らず藤の方。けふ別れてはいつか又。長地逢見ん事は片糸の結び馴れにし夫婦の縁せめて名残を惜まんと。座敷をそつと立出でて。詞經盛卿我が夫と。地尋ね給へど面影は。見ぬ隈々くまぐまを爰かしこ見廻す中に落ちたる一通。披き見るより悔くやりし。詞コレく皆の衆早うく。殿は出陣なされたわいのと。呼ばはり給ふ御聲に。玉織姫女房達。追々に走出て一つ所に寄集り。互に顔を見合せて呆れ果てたる計りなり。地かゝる折節奥庭より間近く聞ゆる轡くまの音。何事やらんと見る所に。江戸敦盛其日の出立いっだには。雛鶴縫うたる直垂に。ナホス鎧は緋威。コハリ同じけの。鉞形打ちたる兜を着て。廿四差いたる染羽の矢。ナホス重藤しげふさの弓を持ち。ハズミヲ勇み進んで乗出し給へば。地玉織見るより帯引締め。小褌かい取りかひくしく。長押ながしにかけたる長刀追取り。母様さらばと庭に飛下り。フシ轡くま面に引添うたり。地御臺は驚きヤアく敦盛。詞都へ登れと父の仰せ。其出立は心得ずと。地尋ね給へば愚かや母上。詞父の命に従ふは一旦の孝行。兄上達一門残らず。骸かみをさらす必死の戰場。地我一人都へ歸り何面目なんめんにながらへん。是より一谷へ馳行き。父に代りて陣所を固め深いひう討死して。名を後代にとゞむる覺悟。親に先立つ不孝の罪。御赦されて下さりませと。ステエ思ひ込んだる其有様。地母上思はず兩手を上げヤレでかしやつた敦盛。詞それでこそ我が子なれ。地ヲ、嬉しいフシぞや。地いて餞別はなびを祝はんと。召したる襦うすひらりと脱ぎ。詞總じて軍に立つ時は。敵に矢種を隠す爲母衣はもろをかけると聞傳ふ。是をかけて出陣しやと。地心の内は筐かたぞといはぬ情や母の衣。箆かたひに。フシ打ちかけ給へば。地ハツア御芳志有難しく。詞コレく玉織。跡に残つて我に代り母上に孝行あれ。戰場へ連行く事は叶はぬと宣へば。地姫はわつと泣出し。年月待つた夫婦の盃。かはす間もなく振捨て。残れとはどうよくな。わたしやどこ迄も付いて。行く。邪魔になるなら今妾で。お前の手にかけて殺してたべ。なんぼうでも離れはせぬと。鞍かぶまに取付き鎧かぶまに纏りフシ歎

き慕ふぞいぢらしき。詞イヤ未練なりそこ放されよと。地あせり給へば御臺所。詞ナウ敦盛。一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事な。連れて出陣々々と。地聞くより姫は有がた涙。母の方を伏拜み暇乞さへあら駒の。手綱に引添ひ勇み立ち。女房達も取々に御見立て申せば敦盛卿時刻移ると鞭ふり上げ。詞然らば母上もうおさらば。ヲ、さらば。地さらばくの別れの聲も母の耳にはきつと立つ。駒のいなき轡の音あふりフシ立ててぞ打たせらる。地跡見送りて藤の方こらへくし溜涙。一度にわつと聲を上げフシどうど。ひれふし給ふにぞ。地女房達走寄りいかゞ渡らせ給ふぞと。様々いたはり参らすれば。御臺は涙の顔を上げ。悲しい物は浮世の義理。敦盛ばかり此母が臆病に育てし故。軍にも得立てぬとさげしみが口惜しさ。地討死にやる母が思ひ。十五や六の小腕といひ。幼い時から舞樂を好き。軍の事は知らぬあの子。つい殺さるゝは知れた事。鍔兜を着て出たのが千騎萬騎を討取つて。分取高名したも同然。詞わけてかはいや玉織が。歌の會か香きゝに行くやうに跡を追ひ。いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが夫婦と成つたしるしには。一夜の枕も交させたく。地二つには敦盛が妹脊の縁にひかされて。軍をまどめてゐるならば一日でも討死の。便を遅う聞かうかと。はかない事を心の頼み親の因果とばかりにて。身を投伏して泣給ふ。楨の尾裏葉染衣も。めいゝ夫の行方迄。思ひくらべて一時にフシ又もや袖をしぼりける。地歎きの耳を驚かすえいゝ聲に人々は。すはや敵こそ入りたれと御臺を奥へすゝめやり。通路の鈴の綱引つちぎり。てん手にたすきにかけ置いたる。長刀太刀小太刀を構へ。恐れげもなく待ちかけしは。さすが名におふ平内左衛門越中上總が妻女とは。いはねど知れてかひくし。地時もあらせず入来るは。平山が郎等成田の五郎。大勢引具し大音上げ。詞ヤア經盛はいづくにある。主人平山の武者所未重。時忠卿と相談あり。玉織姫を取戻し。他人と成つて經盛一家。討亡ぼせとの仰せを受け成田の五郎向うたり。地急ぎ玉織姫を渡し覺悟せよとフシ罵れば。詞ヤア推參なる小二才め。敦盛卿の籠中に定まつた姫君様。武者所でもむしやくしやでもけもないくやる事ならぬ。地長居せば目に物見せん早く歸れと呼ばは

つたり。詞ヤア延び過ぎた術妻め。かたつばし打殺せと。地_下知に隨ふ家來ども拔連れく切つてかゝれば。心得多勢を相手にしてひるまず去らず三人が。蜘蛛かくなは十文字。或は大げさ車切。太刀長刀の稻妻に。こりや敵はぬといふやいな主も家來もわれ一に。表をさして逃出づるのがさじやらじと。三重追うて行く。地跡に御臺はこれなうなう。長追ひ無用あぶないと。あせりながらも油斷なく。一間に飾りし弓と矢つがひ。立出で給ふ折も折。取つて返す成田の五郎。かけ向ふ出合頭切つて放せばあやまたず。胸板はつしと射ぬかれどうど倒れて死したるは。フシ言合せたる如くなり。地追々歸る女房達。此體を見てお手柄く。あはれ成田が身の果とどよめく所へ又むらく。討ち漏されの家來ども主人の敵と込入るを。詞イヤ面倒なと三人がまくり立てたる太刀先に。地双向ふ者も嵐の木の葉ちりちりばつとフシ逃げちつたり。地女房達聲々に。詞サアく申し御臺様。此浦船に打乗つて八島へ渡り殿様に。尋ね逢はせ奉らん。地又も敵のこぬ内に。オクリいざさせ。給へといざみ立ち。すゝめ申せど夫や子の。別れ思へば便なく足も。もつるゝ藤の方。フシ涙に袖を染衣が。勇んで見せる心は裏葉。げに武士の女房に敵も舌を櫛の尾とふり。返つたる女武者三人四人が打連れて。歩めど跡へ引戻す濱の眞砂路つきせぬ思ひ通ふ。千鳥の浦傳ひ船場の。磯へと急ぎ行く。

第

二

地酒極まる時は亂る。樂しみ極まる時は悲しむとかや。二十餘年の榮花の夢跡なく覺めて都をひらき。平家の一門楯籠る。舞須磨の内裏の要害。前は海上はけはしき軋越。ナホス地大手は生田搦手は一谷の山手より。浪打際迄柵ゆひ廻し。赤旗風に吹靡かせ。參議經盛の末子無官の太夫敦盛。父に代つて陣所をかためフシ事嚴重に見えにけり。江戸頃は彌生の初めつた。月さへ入りてくらき夜に。熊谷が一子小次郎直家。先驅して初陣の。ナホス地高名を顯はさんと

出立つ姿は澤洞を。一しほ摺つたる直垂に。コハリ小櫻威の兒鏡。猪首に着なす星兜星の光りに只一騎。ナホス地心は剛
 の武者草鞋。ハズミ足に任せてはやりをの。山道岩角嫌ひなく。一谷の西の木戸。フシ陣門に走りつき。地一息ついて四方
 をながめ。詞ハツア嬉しや我より一番に先驅する者もなし。地跡より人の續かぬ中切入らんとかけ廻れど。亂杭逆茂
 木透間なく。厳しく戸ざす陣所の門。スエいかゞはせんと見廻す内。遙の奥に管絃の音。ホラシ夜は深更に及んだり。
 地折節山路に風もやみ海上も波しづまれば。伎樂のしらべ哀れげに。フシさも面白く聞えけり。地小次郎は思はずも心
 耳をすまし聞きとれて。詞アツア實にも上臈都人は。情もふかく心もやさしと父母の物語。地今こそ思ひフシ合せた
 り。地かゝる亂れの世の中に。長地弓矢叫びの音もなく糸竹の曲をしらべ詩歌管絃を催さる。詞ハ、ア床しさよ。
 地いかなれば我々は。邪見の田舎に生れ出で。詞鏝兜弓矢を取り。かくやんごとなき人々を敵として立向ひ。地修羅
 の劍をとぐ事は。淺ましさよとばかりにて。スエテ覺えず涙を流したり。まだうら若き小次郎が。身の程々を汲分けて
 感ずる心ぞしをらしき。地後の方に蹄の音。誰なるらんと窺ふ内。平山の武者所馬上ゆゝしくかけ來り。小次郎が影
 見るよりも。敵か。味方いぶかしく。何者なるぞと聲かくれば。小次郎もすかし見て。詞ヤア末重殿かさいふ和殿は。
 コハ小次郎かと。地馬よりフシおり立ち。詞フム我より先へ來る者はよもあらじと思ひしに。ホ、心がけ神妙々々外の
 人なら平山が先陣を争うて一番に乗入らんが。初陣の健氣さに先陣を汝に譲る。氣遣ひなしに切入れ。イヤなう
 平山殿。あの管絃の音御聞きなされ。扱も雲の上人は又やさしさが違ひますの。イヤサそれを和殿は得知るまい。昔
 諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ詮方つき。櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て。謀もあらんかと我が智慧
 に迷うて仲達は逃げしと聞く。アレあの管絃も其通り。何怪しむことはない。はや驟入つて高名せよ。但し和殿がお
 そろしくば某が先陣せうか。何と。地くくと持たされ。血氣にはやる小次郎直家。木戸口に走寄り。門打たき大音
 上げ。調敵の陣へ物申さん。武藏國の住人私の黨の籠頭熊谷の次郎直實が一子同苗小次郎直家先陣に向うたり。平家

方に名有る人々出あうて勝負有れと高らかに呼ばはれば。地門内も騒立ち。すはや敵の寄せたるぞ。出向うて討取れと。木戸押開けば小次郎は太刀抜きかざし駈入るを。ソレ遁すなと軍兵ども俄に騒ぐ鯨波。太刀音人聲かまびすし平山いかゞとためらふ所へ。熊谷の次郎直實。我が子の先陣心に徹しッシ足を空に駈來り。詞ヤア平山殿候な。忬小次郎見給はずやと。地尋を待たずされば。詞最前是へ見えし故小次郎に色々段々。あの大勢の敵の中へ一騎打は敵はぬぞや。モひらによしに召され後詰を待つての事がよかろと色々にいさめても。地はやり切つたる若者無二無三に切込まれしと聞くより直實髪逆立ち。子を失ひし獅子の勢ッシ敵の陣へかけ入つたり。諷爰やかしこの鬨の聲。ナホス地聞くに平山獨りゑみ。詞ホウ思うたつば。親子共に袋の鼠今の間に討たれをろ。日頭からあの熊谷めと六彌太めが出頭を。くい〜と申うて居たに。エ、時節もあればあるもの。手を濡さず風の神よりよい敵。其の上親子も剛の者。死者狂ひと働かば。よつほど敵も惱ましをろ。地あらごなしさせ討死さし。其跡へしかくれば高名手柄は思ひの儘うまいぞ。合〜。合〜とぞく〜勇みッシ悦ぶ所へ。地木戸口に數多の人聲。スハ敵ぞと身構し窺ひ居るも。くらまぎれ。熊谷次郎直實我が子を小脇にひんだかへ。陣門をずつとかけ出で。詞ナウ平山殿おはするか。忬小次郎手を負うたれば養生加へに陣所へ送らん。地お手柄あれと言捨て、ッシ飛ぶが如くに急ぎ行く。地平山案に相違して油断ならずと馬引寄せ。打乗る間もなく門内より數多の軍兵抜きつれて。我討留めんと驅出づれば。詞心得たりと抜合せ。受けつ流しつ多勢を相手。地火花をちらして挑む内。地無官の太夫敦盛は。爽かに六具をかため駒を進めて乗出し。地平山を見るよりも。詞まつしぐらに打寄せ給へばさしつたりと渡り合ひ。地暫しは支へ打合ひしが。詞先を取られし武者所。殊に多勢に取巻かれ。地臆病神の誘ひてや。駒の頭を引返し行先知らず逃出せば。ヤアきたなし返せと聲をかけいづく迄もとあふり立て跡を慕うて。三匹追うて行く。詞敦盛様ア太夫様いなう。この暗いのに只一人。あぶないはなうお歸りと。ッしいへどあてども波近き。地磯端をうる〜と袖は涙の玉織姫。夫を尋ね朧夜に心細

身の一腰かい込み。あなたへ走りこなたへ迷ひ。すまの浦邊をそこよ。爰よとフシ尋ね。さまよひ給ひけり。フシ早しのゝめに人顔も。ほのかに見えし山道よりフシ平山の武者所。漸く逃げのび須磨の浦。駒の足を休めんとフシ暫く息をつぐ中に。地玉織姫と見るよりも。やがて馬より飛んでおりつかくと立寄つて。詞コレお娘。テモよい所て出會ひました。いつぞや京で見初めてから。目の先にちらつくやうて。起きても寝ても忘れられず。思ひ餘つてそ様の親御時忠殿へいうたれば。やらうとあるを幸ひに迎ひにやつた其跡でも。ア、生娘なら術ながら。マア寝てからどうしてかうしてと。ほんにくとこもかも木のやうに成つて待つてゐたに。迎ひにいた支番を殺しよう待ちほうけに召さつたなう。サア 地乗物の代り此馬に乗せ。連れていんで女房にすると。引立つればふりはなし。詞エ、あたいやらしい。親が赦そがどうせうが。敦盛様とは二世の約束。かういふ内にも御行方を尋ね逢うて死なば一所。地邪魔しやんなと驅行くをひん抱へ。詞ム、敦盛を尋ねるのか。ヤレなんぼ尋ねても敦盛の行方。水の底迄在所は知れぬ。そりやなぜに。ヲ、敦盛はたつた今我が手にかけて討つて了うたヤアなんと。敦盛様を討つたや。地ハアはつと計りにどうど伏し。人目もわかずフシ聲を上げ歎き。沈ませ給ひしが。地夫の敵と身構へし切付くる。腕首擱んでヤアこいつ手向ひか。詞モウ了簡ならぬといふ所を言はぬ。ても此手の柔らかさ尋常な事わいな。モどうもエ、武者震のする程どうもならぬ。コレ悪い合點ぢや。とんと心を入れかへ。地おれに随ふ氣にならしやれ。女房に持つてかはいがるササ。どうかくとフシ猫なで聲。地姫の怒りの涙まじり。詞コリヤ世が世ならそちが様なむくつけな侍は傍邊へも寄せつけぬに。随への躰けのとは穢はしい忌はしい。地エ、腹立やと又切付くる。腕首捻上げ取つておさへ。詞サア女房に成るかならぬか。いやなら殺すが何とくと。地太刀拔持つて傍若無人。ヲ、殺さば殺せ畜生め。エ、誰ぞ強い人が来て。こいつを切つてくれぬかと。スエもだえフシ給ふぞいたはし。地強氣の平山むつとせき上げ。詞ヤア、につくい女め。躰かぬ上に色々の雑言。恥面かゝされ堪忍ならず。地生置いて人の花と詠めさすもむやくしい。思ひ知

れと持つたる刀。胸板ぐつと突通せば。フシあつと一聲苦しむ折から。地後の方に鯨波。すは又我を追ひ来るやと。駒を引寄せ飛乗つて逸散に其場遙にへ落夫せけれ。詭去る程に。御船を始めて。一門皆々舟に浮かめば乗り後れじと。汀に打寄すれば御座船も兵船も。遙にのび給ふ。地無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ。御座船に馳着いて。父經盛に身の上を告げ知らす事ありと。須磨の磯邊へ出でられしが。舟一艘もあらざれば。ハズミ詮方波に駒を乗入れ。フシ沖の方へぞ打たせ給ふ。詭かゝりける所に後より熊谷の次郎直實。ナホスヲ、イ〜と聲をかけ。駒を早め追つかけ來り。詞ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大將軍と見奉る。正なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。斯く申す某は。武藏國の住人熊谷の次郎直實見參せん返させ給へと。地扇を上げて指招きフシ暫し〜と呼ばはつたり。地敵に聲をかけられて何か猶豫の有るべきぞ。敦盛駒を引返せば。熊谷も進み寄り。互に打物抜きかざし。朝日に輝く劍の稻妻かけ寄り。かけ寄せちやう〜。合てふの羽がへし諸鎧。駒の足並かつし〜。合下ギンかしこは須磨の浦風に。鎧の袖はひら〜。合群れある千鳥村千鳥むら〜ばつと引汐に。寄せては返り。返りては又打ちかくる虚々實々。勝負も果てしあらざれば。詞いそうれ組まんと敦盛は打物からりと投給へば。コハしをらしと熊谷も太刀投捨て、駒を寄せ。地馬上ながらむずと組む。えい〜の聲の内。互に鎧を踏みはづしフシ兩馬が間にどうど落つ。地すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて抑へ。詞かく御運の極る上は。御名を名のり直實が高名譽を顯はし給へ。又今生に何事にも思ひ残す御事あらば。必ず達し參らせん。地仰せ置かれ候へと懇ろに申すにぞ。敦盛御聲爽かに。詞ヲ、やさしき志。敵ながらあつばれ勇士。かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前の面目。戰場に赴くより。地家を忘れ身を忘れ。兼てなき身と知るゆゑに。思ひ置く事。フシ更になし。地さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞給はゞ嘸御歎き思ひやる。詞せめて心を慰む爲。討たれし跡にて我が死骸。必ず父へ送り給はれかし。我こそ參議經盛の末子。無官の太夫敦盛と。地名乗給ひしいたはし。木石ならぬ熊谷も。ステテ見る目涙にくれける

が。地何思ひけん引起し鏝の塵を打拂ひく。詞此君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ。折節外に人もなし。一先
 爰を落給へ。早うくと。地言捨て。立別れんとする所に。後の山より武者所數多の軍兵。詞ヤアく熊谷。平家
 方の大將を組敷きながら助くるは。二心に紛れなし。地きやつめ共に遁すなと聲々に罵るにぞ。熊谷はつとばかりい
 かどはせんとフシ黙然たり。地敦盛卿しとやかに。詞とても遁れぬ平家の運命。爰を助かり行先にて下司下郎の手に
 かゝり。死恥を見せんより早く御身が手にかけて。地人の疑ひはらされよと。西に向ひて手を合せ。御目を閉ぢて待
 給へば。地いたはしながら熊谷は御後に立廻り。彌陀の利劍と心に唱名。ふり上げは上げながら玉の様な御粧ひ。
 情なや無慚やと。胸も張裂く氣後れに。太刀ふり上げし手も弱り。思ひにかきくれ討ちかねてフシ歎きに時も移るに
 ぞ。詞ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよと。地捻向き給ふ御顔を見るに目もくれ心さへ。詞忤小次郎直家と申す
 者丁度君の年恰好。今朝軍の先がけて薄手少々負うたる故。陣屋に残し置きたるさへ心にかゝるは親子の中。それ
 を思へば今爰で討奉らば。嗚や御父經盛卿の。歎きを思ひ過されと。地さしにも猛き武士も。フシせざる涙にくれ
 ゐたる。詞ア、愚や直實。悪人の友を捨て。善人の敵を招けとは此事。地早首討つてなき跡の回向を頼むさもなくば。
 生害せんとすめられ。ア、是非なしと立上り。詞順縁逆縁俱に菩提。未來は必ず一蓮託生。南無阿彌陀佛。南無阿
 彌陀佛。フシ首は前にぞ落ちにける。地人の見る目も恥かしと御首をかき抱き。曇り聲をはり上げて。詞平家の方に
 隠れなき。無官の太夫敦盛を。熊谷の次郎直實討つたりと呼ばはるにぞ。地磯に臥したる玉織姫絶入りし氣も一筋
 に。夫を慕ふ念力の耳に入りしかむつくと起き。詞ナウしばし待つてたべ。敦盛様を討つたとは。いかなる人かナウウ
 らめしや。せめて名残に御顔を。一目見せてといふ聲も。深手にフシ弱る息づかひ。地見るより熊谷御首携へ歩み寄
 り。詞敦盛を慕ひ給ふはいかなる人と尋ねれば。地今はの苦しき聲色にて。詞我こそは敦盛の妻と定まる玉織姫。お
 首はどこに。エ、もう目が見えぬと。撫廻せば。ム、何お目が見えぬとや。ヲ、いとしや。御首はコレに。

こゝにと手に渡せば。わつと泣く／＼しがみ付き。膝にのせ抱きしめて消入り絶入り歎きしが。詞ナウこれ敦盛様ア
 はかない姿に成り給ふなう。陣屋を出てさせ給ひしより御跡したひ方々と。尋ぬる中に源氏の武士。平山の武者所。
 我を見付けて無體の戀慕。だまし討たんも女業。この如く手にかゝり。二人が二人で悲しい最期。せめて別れに御顔
 が。見て死にたいと思へども深手に心が引入つて。日さへ見えぬか悲しやと。又御首を撫てさすり。宥の管絃の笛の
 時後にとありし御詞が。今生後生の形見かや。此世の縁こそ薄くとも來世では未ながう。添ひとげてたべ我が夫と。
 顔に當て身に添へて。思ひの限り際限り。泣くねは須磨の浦千鳥涙にひたす袖の海。引く汐時と引く息の。フシ知死期
 と見えて絶果てたり。地熊谷は茫然と。詞どちらを見てもつぼみの花。都の春より知らぬ身の今魂はあまざる。
 地歸に下りてなき跡をとふ人もなき須磨の浦。なみ／＼ならぬ人々の成り果つる身の痛はしやと。スエテ悲歎の。涙に
 くれけるが。地是非もなく／＼玉織の。フシ死骸を取りをさめ。地母衣をほどいて敦盛の。御死骸を押し。サハリ總
 角取つて引結び。手綱をたぐり結付ける。鞍の鞍やしを／＼と。弓手は御首。フシ携へて。地右に轡の哀れげに。檀特
 山の。うき別れ。悉陀太子を送りたる。車懸童子が悲しみも同じ。思ひの片手綱涙。ながらに。三更歸りけり。地昔
 より爰も名におふ。津の國の。兎原の里に幽なる殖生の宿に獨居の。長地林は老の營みに糸針取つて人仕事つゞりさ
 せてふ洗濯の。糊かい物を打盤の。手元も暗き。フシ黄昏時。フシ世のうきに。いさ／＼めならぬ身の願ひ。フシ忍びて
 人につげ櫛の。地薩摩守忠度は俊成卿の館より。須磨の陣所へ歸らんと。急ぎの道も行暮れて。宿もがなと爰かしこ。
 スエ荒れし軒端もまばらなる。伏屋の門に立寄り給ひ。詞都方より西國へ歌修行の旅の者。案内知らぬ道に勞れ。日も
 暮れたれば迷惑致す。率爾ながらお宿の御無心。頼入ると有りければ。ハア、いや爰は所の法度にて人宿は致さねど
 も。我も人も行暮れて宿の無い難儀な物。地殊更優しき歌枕。御修行のお方と聞けば別條もあるまい。宿はせずと
 もマアはいつて。煙草でも參りませと。戸口を明けて。詞ハアお前はどうかやら見た様なお方ぢやが。ヲ、それよ前方

都てお目にかゝつた忠度様でござりますな。ム、そなたは五條の三位に居た。菊の前の乳母うぶでないか。成程々々、ハテ珍しや。お久しや。地先づこなたへと伴ひて。フシ上座に直し手をつかへ。詞マア何か指置きお尋申しませうは。此度源氏の軍勢。平家を攻めんと都へ亂れ入るに付け。御一門残らず西國へ落ちさせ給ふと承りましたが。お前ばかり何として今迄都にはござりました。ホウ其仔細は兼てそなたも知る通り。某は俊成卿の和歌の弟子といひ。分けて親しき申なるが。地此度師卿しやう撰まれし千載集に。我が詠歌を加はりなば。たとへ敵の手にかゝり屍は野山にさらすとも。此世の本望敷島の道を求めしかひならんと。思ふ心の一筋に。詞狐川より引返し。俊成卿の館に立越え願ひしが。かゝる時節に平家の詠歌私に加へん事もいかゞと。息女をもつて尋ねの爲源氏方へ送られしが。いまだ其沙汰なき内に。早や合戦最中と聞き心せかれて立歸る。地生田の陣所も程近しとは言ひながら。暮に及べば陣門も開くまじと。此所へ立寄りしも不思議の縁と宣へば。詞されば妾めかけも幼なじみの夫が不所存。置去りにして行方知れざる折から。縁を求めて俊成様へ乳母奉公。養やしな君菊の前様御成人に就きお暇申し。かゝるべき悴も有つたれど。地性がわるさに勘當致し。今獨身ひとりごの貧樂ひんがくと應ぜぬ苦勞はござりませぬが。承ればお前と菊の前様は。どうやら譯のある。ハア、いや私に御遠慮はない事。それに就いてお話申す事もあれどこりやおつての事。地まあ〜遠路えんろのお草隊くさたい。あれへござつてお休みと。いふもやさしき待遇たぐいに。貧家の塵も繕はぬ。ヒロヒ主が案内に打連れて。フシ一間にこそは入給ふ。ハルフシまだ宵ながら。かきくもる。空も心もコハリくら紛れ。うそ〜窮ふ大男。枳殼あきの生垣なまきり破りぬつとはいいつて上り口。納戸なだへしかける。ヒロヒ指足ぬき足。ナホス忍び込む間に主の林。物音聞付け立出てて窺ひみるともフシしすまし顔。地袋に入りし一腰かい込みギンをろり〜と表の方フシ出でんとするを。詞コリヤ待てと。聲かけられて恟げうりし。逃行く所を飛びかゝり。むしやぶり付けて引戻せば。地遭れんやらじと擱お付き。引つばるはずみに頬かぶり脱はなけて落ちたる顔見付け。詞ヤアわりや太五平ぢやないか。ア、これ〜母ぢや人。聲高こゑたかいにいはしやんな。盗人を捕へて見れば

我が子なりけりぢや。人がしつては俺おれよりまあ。こなたの外ぐわい聞きが悪いわいの。テモさても憎にくやの。おのれがやうな性の悪いやつがあらうか。ハテあればこそ酒も飲みます。色事はこつち任せ。三づ絃げんもちつくりかじるてや。喧嘩もめつたに前ま先の見えぬ事はせず。又これくもあんまりにじりがすりはくひませぬわいの。ア、慮外ながら萬能に達した男。サア其悪い事が積つて親に様々難儀をかけ。妹娘を勤奉公にやつたも皆みな汝故おれ。また其上は上塗かけ。盗みする様に成つたは。よくく因果な生れ性じやう。そしてまあ外でもある事か。親の内へ盗みにはいるとは。ア、これく。こなたもほんに年に似合はぬまだな事はしやるわいのコレ他人の所へはいるとの。忽ち此首がござらぬわいの。そこで若し見付けられても命に氣遣ひのない様に。高をくつて親の内へはいつたは。我が子ながらもア、發明な者ぢやと譽めてはくれいで。何ぢややらぐどくくくと。愚痴な事ばかりいしやるわいの。コレそんな事聞きや氣が盡きますと。地いひつゝ腰のすつぽんからありあふ茶碗へどぶくく。詞ソレそれく其酒が止やまぬから發つて横着な氣も出るわい。コリヤやい。見るかげもない此母がな。人仕事して漸やうと其日を送れば。いかなく一錢の貯も。サアあつてたまる物かいの。ない事はおれがよう知つてゐる。ぢやによつて錢銀の望はない。コレ此一腰がほしさに。イヤそりやならぬ。といはしやるは。エ、親父殿が残し置かれた軍代といふ事か。サアそれぢやによつてよう切れうと思つて。盗む心は。商あなひせうにも資本もとはなし。仕覺えた職もなければ。人足廻しの茂次兵衛所にかつて居て。歩荷かた持もしても。儲けにくい物は錢ぢや。それに毎日飯はん代だを拂ははにやならず。三文でも餘つた時はかたかはくんでやつてのける。是ぢや濟まぬと思ふからふつと氣の付いたは。今源平軍の中。うそく見廻つて拾ひ首でもしたら知行に成るまい物でもない。思ひ付きは付いても是も丸腰ではならぬ商賣。夫おれて此双物を盗むとはいふ物の。親の物は子の物ぢや。コリヤ貰もらひますぞや。アレまだのぶとい事ばかり。子なれば遣たれどわりや勘當したりや他人ぢやわい。サそんなら借ります。イヤならぬと。フシせり合ふ中へによつと来る。人足廻しの茂次兵衛が。詞ハア太五平

爰にか。ヤ婆様何やらせり合はしやるが。ア、扱は勘當の詫を聞くまいといふことか。イヤなう詫所ぢやござらぬ。やつぱり性根がア、コレ／＼直らぬとはいはれまい。おれが世話にしてからめつきりとよう成りましたぞや。もう了簡してやらつしやれ。コリヤ／＼太五平。うっかりとしてゐる所ぢやない。此度の軍に就いて弓持の鑓持のと大分人夫が入る故。それ／＼の人を詮索してやつたが。まだ簾持がたらぬ故そちをやらうと思つて一遍尋ねた。外の事より辛うはせいで。マア賃がよいがいかなぬかと。地聞いて林が早や氣遣ひ。賃がよつても軍場は命がけ。こりやよしにしたらよかる。詞ハテやくたいもない。高で命に氣遣ひがあれば。雇はれる者は一人もござらぬ。あつちの手下と違つて。道具持は切合の勝負はせず。若し流矢でもくれれば。地楯の後へちやつと隠れる。詞婆様えいか。地鐘長刀がひらめけば。人の後へちやつとかゝむ。とかくちらほら氣轉きかしてフシ立廻れば。詞怪我する事は微塵もない。ほんのこけ知らずといふ物ぢや。其段は此茂次兵衛が受合。コレ即ち先様からきた。丈夫な装束見せましょと。フシ風呂敷ほどき取出すは。雑兵なみの陣笠鎧。見るに太五平ぞくつき出し。そりやおれが望む所ぢや。大勢に打交りえい／＼わいが言つて見たい。ヲ、サそんならちやつと身拵へと。地てん手に帶とく布子ぬぐ。眞眞屋襦袢の上に黒革の。鎧上帶ナホスしつかとしめ。一腰さすが侍の小手脚當も似合うたと。陣笠着せて。詞コレ太五平。そちは先様知るまいから。鼻に所をヲツト合點母じや人。ヲ、そんなら太刀の折紙を。添へてやらうと納戸より。取出し渡せば忝い／＼。詞コリヤ怪我すなよ。ヲ、夫もよい／＼此形も。よい／＼やな。よい。よいやな。よい／＼／＼よいやな。地身ぶりは練物見る如く。オクリ勇み進んで。フシへこそは急ぎ行く。フシ林は跡を。打眺め。詞不具な子がかはゆいと。有様は不便にござる。地にもかくにもお前のお世話。忝うござります。詞お禮がてらに酒一つ進ぜたいが。奥には仕事を取散らして置きました。納戸でなりと參つて下され。イヤそりや御無用。ハアテ買つては進ぜぬ。餘所から買つた諸白に。鯛の肴でたつた一つ。地是非に／＼と無理やりに。納戸へ押遣り勝手から。銚子盃持行くも。フシ子故の愛想

と知られたり。地風さをふ。ハルフシ道の時雨も。戀故に身は濡鷺の菊の前。走着いたる一つ家の。門の戸けはしく打叩き。明けてくくと宣へば。林は聞付け誰ぢやく。イヤ 詞大事ない者ぢや。大事ない者とは。ハテわしぢや。菊の前ぢやわいの。ヤア。お姫様とは心得ぬと。地庭にかけおり戸を明けてほんにさうぢや。詞まあくお入り遊ばせと。地いふ中もどうやら氣遣ひ。見れば付添ふ人もなし。何として夜に入つてお一人お出でなされたぞ。詞さればいの忠度様の遊ばした。お歌の事にとかやくと隙取る内を待兼ねて。お立ち有りしと聞くと早や跡を慕うて。地フシ出でたれども。地心に任せぬ女の足。爰迄來ても追付かれぬ。詞道は知らず日は暮れる。そなたの所は前方に。摩耶参りの時寄つたを便り。漸う尋ね當りしが此やうに後れては。忠度様に逢ふ事は。成るともく。そりや又どうして。コレ。忠度様は先程お出なされて奥にござる。ヤア夫はほんか嬉しやく。早う逢ひたいあはしてたも。成程お逢ひなされませ。ぢやがコレ。旅草臥て休んでござる。けたまう起さずと。そつとはいつて肌身を付け。しつぱりと御寝なれと。地粹な詞におもはゆく。ヲ、乳母とした事がじやらくと何ぞいの。わけもない事ばかりといひつゝ片頬に笑の肩。ひらく襖も待兼ねて。フシいそくとして入給ふ。折節納戸の暖簾上げ。欠伸ましくら立出づる茂次兵衛。詞婆さま。いかい雜作でござつた。是は扱わしとした事が。不作法な亭主ぶり。イヤモ手酌でたべつおさへつ。銚子切り引つかけたりや雇入がしてぐつたりと寢てのけた。内に大分用がある。いかい馳走。其内きましよと。地言捨て。とつかは急ぎフシ立歸る。ハルフシ時しも一間。地騒がしく何の様子か菊の前。襖をあけの裾蹴はらし。かけ出て給へば林は驚き。コレく申しと引止め。詞何事が發つたか氣色をかへてとつかはと。お前はどこへござります。様子おつしやれどうぢやく。サア其様子はの。忠度様がどうよくな。わしに暇をやるよいの。ム、そんならお前のお腹立は尤もぢやが。高いも低いも夫が女房に暇をやるは。よくく了簡ならぬ筋か。其譯を立てなされにや。コレ科ないお前に疵が付くぞへマアとつくりと氣を鎮め思案して御ろうじませ。イヤ思案迄もない。其譯は立つてあれど。

朝互に思ひ初めしより夫よ妻よと言ひかはし。一生添はうと思つた物。縁切れては片時も何と存らへ居られうぞ。恨みつらみもありそ海一思ひに身を沈め。底の藻府となる覺悟。とめずと殺してたもいなう。死ぬる／＼とばかりにて。フシ跡は詞も涙なる。イヤ／＼ 詞何ぼさうおつしやつても。乳母はどうも合點がいかぬ。是には定めて深い様子。ホウ其仔細は忠度が。とくと申聞かせんと。地しづ／＼と立出て給ひ。詞天の憎む所天必ず誅討すと。入道の不善一門の積悪によつて。かく迄傾く平家の運。地此度の戦ひも十が九つ味方の敗軍。某も討死と覺悟極めし事なれば。詞いつを期してか添果てん。思ひ切つて歸られよと。いへども中々聞入れず。陣所へ伴ひ行かんとある。時には忠度女に迷ひ陣中迄俱したりと。世の人口にかゝるといひ。死後迄縁を切らざれば。地俊成卿の御身の上。平家に親しき咎を受け。終には源氏の仇となつて亡び給はん悲しさに。詞態と難面くいひ放し。暇をやりしは忠度が。師の厚恩を報ぜん爲。恨みと思ひフシ給ふなよ。地とはいへもしも運に叶ひ軍に勝たばながらへて。再び逢はんも計りがたし。詞それを頼みに行末の。契りを樂しみ待給へと。地口には諫め心には。これ今生の別れぞと思ひ廻せばいぢらしく。さしも武勇に張り詰めし。弓弦の切れし心地にてゐるもゐられぬ座を背け。脇目に餘る御涙フシつゝみ兼ねさせ給ふにぞ。地それと悟りて菊の前。イヤ／＼ 詞何ぼ其様に。再び逢ふの添はれるのと。潔うおつしやつても。誠にからぬ身の覺悟。地討死と知りながら何と見捨てゝいなれうぞ。いづく迄もお供して生きるとも死ぬるとも。一所でなけりやわしやいや／＼。むごいつれないお心と。縋り付いて泣き給へば。林も心根思ひやり。ステテ俱に袂をしぼりしが。地態と勇めの聲勵まし。詞今の程事を分け。利害を説いて言ひなざるに。たつてお供とおつしやれば。親御様へは不孝といひ。殿御の爲には猶ならぬ。地いかに姫ごぜなればとて其辨へがないかいなう。ア、うとましいお子ではあると。詞を盡して俱々に諫めすかせどいやおうの。應も涙中々に離れがたなきフシ風情なり。地折節風に誘はれて。間近く聞ゆる鯨波。耳を突抜く鉦太鼓、亂聲に打立て／＼。どつとかけくる討手の大將。眞先に大音上げ。

調ノリ平家の落人薩摩守忠度。此家このかに忍びおはする由。注進有つて慥に聞き。召捕らん爲梶原平次景高が向うたり。縦たて
 へ鬼神おにがらなればとて。八方を取圍めばとても遁れぬ。尋常に繩かゝられよ。異議に及ばは踏込んで搦捕る。地ちいかにい
 かにと、フシ呼ばはつたり。地人々扱は茂次兵衛が。注進せしかと驚けば。ノル地忠度ちつとも動じ給はず。二人を奥
 へ忍ばせて。太刀おつ取つてつゝ立上り。ヤア 詞をこがましや景高。源平互に鎬しのぎを削り刃やいばを争ふ戰場には向はず。
 我一人に多勢を以て取圍む卑怯者。汝如きにやみくゝと繩かゝる忠度ならず。地いでや手並を見せんずと。太刀拔放
 しフシ身繕ひ。地景高苦つてソレ踏込め。下知に従ふ雑兵共。門の戸蹴破り一同に。かけ入りくゝかけ向ふ。多勢を
 屈せぬ早業に眞甲まことよろい。立割車切たちわり。四方八方ばつし。雑立て給へば雑人ばら。フシ皆我一に跡ずさり。詞忠度怒りの
 御聲にて。うぬら如きに双物はいらすと。地大手を廣げ待給ふ。ハルキン手並にこりぬ雑兵共。一人がかりは敵はじと。
 大勢一度にどつと寄る。引摺ひきひらんでは人際ひとまは。あやどりなどを見る如く目覺しかりける。三重次第なり。地勇力無双の
 働きに。さしもの景高氣後きうごれし。逸足いさとし出せば雑兵ども。敵はじめのといふ波の。立足ちももなく我先に。むらくばつ
 と。フシ逸失せけり。地相手なければ忠度卿。息を休むる其中も油断ならざる殖生のやどり。いかゞして防がんと。
 心を配る時しもあれ。地又も寄せくる鬨なげの聲貝鉦しづめ。鼓攻め太鼓。フシ手に取る如く聞ゆれば。地忠度はつと心付き。
 調扱てうあつかこそ景高。大軍を催し重ねて向ふと覺えたり。戰場ならば敵の勢。何萬騎にて圍むとも打破り驕おごりませ。譽を顯
 はし見せんずもの。地軍中に引返し願ふ詠歌も腰をれの。望も叶はず剩へ。さしも名高き忠度が。斯く荒屋あらかやに身を忍
 び。敵に圍まれやみくゝと。生捕られんは後代迄。屍の恥辱名の穢れ。エ、口惜しや淺ましやと。拳を握り齒齧はなはをなし
 怒りの涙てる月に。雹へうを降らすが如くにて。ノルフシいたはしく。も亦道理なり。コハリ地透すまもあらせず表の方。寄せく
 る軍兵むら立つ提燈天地を。てらし亂れ入るよと見る所に。ナホス地さはなくして討手の大將。掛烏帽子に花田の大紋おほもん
 ささはやかに。長袴ながはかまのくゝりをととき悠々然と立向ひ。詞武藏國の住人岡部の六彌太忠澄。忠度卿に見參と。地しづく

と通り傍近く謹んで。詞此度源平兩家の軍は。私ならぬ院宣を蒙り。範頼義經繩向へば。兩陣互に晴勝負。潔き軍はせずして。抜けがけせし景高が卑怯の振舞。聞くに忍びず此六彌太が参りしは義經の嚴命。其仔細は。先達て俊成卿へお頼み有りし御詠歌の内。さど波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かな。右の御歌千載集に入りしかど。勅勘ある御身なれば。名は憚りて。讀人しらずとなりし趣。則ち集に入りたる印。此短冊御覽に入れよと。地山櫻の流枝に。結び付けたる以前の短冊ヲシ恭しく差出せば。地忠度につこと打笑み給ひ。詞我が詠歌を我筆の。願ひも仇花ならぬ印。御芳志の山櫻。ハア、忝しと押戴き。敵味方と隔つれば打捨置かるべかつしを。思ひ寄らざる義經の仁心にて。歌人の數に加はり。和歌の聲を残す事。生涯の本望死しても忘れぬ。ヲシ悦びぞや。地とても遁れぬ身の不運。死すべき時に死せざれば。死に勝る恥有りと。名もなき愚人の手にかゝり。見苦しき最期もせんかと。後悔せし折に幸ひ。詞武勇の聞え隠れなき。六彌太に生捕られれば忠度が恥辱はあらじ。サア。依て繩かけられよと。地ヲシ御手を廻し待給へば。コハ。詞心得ぬ御仰せ。某君の討手には参らず。敵味方の勝負は戰場。其時兩家の晴業容赦はないぞ。互に時の運に任せん。但し梶原が如き弱きを見かけ。拔駈して手柄にせんと。思ふ様な六彌太と思召さるゝか。ハ、ハ、ハ、地ヲシはつとあざ笑へば。地忠度卿理に服し。詞實に是は誤つたり。盛んなる時は制し。衰ぶる時は制せらるゝ理。いかなれば義經といひ汝汝誠有る一言。心魂に徹して今さら返す詞もなし。地惜しからぬ命なれども明けなば陣所へ立歸り。花々しく軍をせん。其時望みは御邊が首。忠度卿は我討取る。必ず討たれよ。おんでもない事。アレ／＼八聲の鷄も鳴く。明るる間近しと申せども。路次の狼藉覺東なし。陣所へ御供仕らん。ソレ／＼用意の馬引けと。地飾立てたる黒の駒。御前に差寄する。辭するに及ばず忠度卿。立髪擱んでゆらりと召せば。地一間の内より菊の前。コレなう暫しと駈出て給ふを林は押とめ。立身で隠せば岡部の六彌太。夫と悟つて忠度の。脱ぎかけ給ひし上着の袖。刀を抜いてふつつと切り。詞コレ／＼乳母といふに恠りハテ扱。詞ふしぎな顔せまい。總じて。

老女は軀からだといひ。又姥うばとも呼ぶ。今宵忠度卿の。お宿を申せし御褒美に是を遣はず。それとも。若々しき錦の片袖。年寄が貰うて益なしと思はゞ。外にほしがる方も有るべし。是も其。人の形見と思へども。猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心。ナ。其方が耳にソレ。菊の前よく心得て。地お受け申せと差出せば。地コハ冥加なき仕合と。戴く右の片袖は右の腕うでを落ちかたの。軍に討死し給ひし。フシ後の哀れとしられたる。ハルツ思ひの種や涙の種。仁義を種の六彌太が。東雲しんうん近し急がんと先に進んでたつか弓。いはぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顔に。見送る姿ふり返る心の種の詠歌よみうたも昔ながらの山櫻。散行く身にも指かざす流の枝の短冊は。世々に譽を残す種。歎きの種の離れ際。諫めを種と隔つれど。はてし涙の悲しみを俱になづみて耳を垂れ嘶く。聲も哀れそふ駒の。足取り諸手綱引き。わかれ行く騮うまの空も。名残や惜むらん

第三

歌世にあらば又歸りこん津の國の御影の。ナホス松と詠み置きし。地一樹ひとこゝろと俱に年を経し額ひたいの黒痣くろしず口癖に。佛の御名を唱ふれば。白毫びやくごうの彌陀六と。人に知られし石屋有り。實に交りも信心の同氣同行相求め。朝暮あさぐす動むる看經かんぎょうの責念佛せきねんぶつの終りには。諸國諸山に建置たてきし石塔いしだつにある戒名の。數も限りもなむあみだ。願ねがひ此功徳このとく平等びやうどうの回向くわうの聲も殊勝しゆじやうなり。地日暮紛ちぢくまれに門口へ連立つれだつてくる石屋ども。親父殿内にかといふ聲聞いてずつと立出で。詞ホウ同行衆ごうぎやうしゆようござつた今日は大分だいぶん閑ひましさに仕事の形かたちで直ただに看經かんぎょうたつた今了いましやつた。サ、上らしやれなむあみだ。アイヤこれ彌陀六殿。今夜は數珠ずしゆくりの數右衛門すうゑもんが逮夜たいたや。百萬遍申すによつて誘まねひに來ました。ほんにさうぢやどりや參まゐりましよコリヤお岩まだ彦助ひこすけは戻らぬか。ソレ娘むすめが起きたら藥くすりあたゝめて飲ませ。若し石塔いしだつを誂たへさしやつたお若衆わかしゆが見えたら戻る迄待たして置け。サア、ござれちやつと念佛ねんぶつかき込んで夜食よじきを申そぢやあるまいか。ヲイ、佛ぶつも百味ひやくみの飲食おんじき。こちも

奈良茶の御食せう。しよざい佛法腹念佛。地門念佛を口々にフシ打連れてこそ急ぎ行く。地跡へ下人の彦助が杓の先
にぶら／＼とフシ網繩引きかけ立歸り。詞ヤレ／＼しんどや。お岩殿肩も腕もめり／＼いふわ。ヲ、道理々々ざぞ草
臥。そして石塔は建ちましたか。イヤまだ建てはせぬが。おりや内に用があると思つて先へ戻つたが旦那殿は奥に
か。イヤ／＼同行中に百萬遍が有つて參らしやつたわいの。ホウそんなら幸ひ。此間小雪様が病氣ぢやとて引込んでご
ざるは。彼の石塔を眺へさしやつたお若衆に。戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入らぬ内意見せうぢやあるまいか。
イヤそりやわしも如才はない。此間から色々といつてもいかな／＼。此戀が叶はねば井戸へ身を投げるの首しめて死ぬ
ると怖い事ばつかりいうてぢや。ホウそりやいやなこつちやの。ハアそんならかうぢや。たつた一度で思ひ切らし
やれと。とつくりと合點さしていつそ逢はそぢやあるまいか。ハテもうせう事がない幸ひ今夜お若衆が見える筈ぢや
が。其間に旦那が。ア、何のいの百萬遍ならちやつとぢや有るまい。マア娘御に其譯いうて工面さつしやれ。おりや
寢所で彼の時分。獨角力を取りましたよと。地言ひつゝ勝手と奥の間へ。フシ別れてこそは入りにけれ。半太夫既に其
夜も。丑三つの。風しん／＼と更渡り。スエいと物すごき時しもあれ。音取の聲の哀れげに。ほの聞ゆればいとゞ
猶。心ぼそさとフシ訝しさ。地小雪は部屋を立出てて灯火かゝげ窺へば。門の戸ほと／＼叩き。詞頼みませう。
地／＼といふ聲は紛ふ方なきお若衆様。ヤレ嬉しやと飛んでおり。戸口を明けてようこそお出で。サア／＼こちへと
伴うて。下に居る間も胸せかれ顔は上氣のはぢ極。差俯向いてもぢ／＼と。挨拶も出ぬフシ其内に。地お岩が聞付け
走出て。地是は／＼お若衆様。今日お出の約束故只今迄待ちました。なぜ更けてお出なされた。されば手前はちと
様子有つて人目を忍ぶ者なれば。晝は勿論夜とても密な時刻を心がけ。態と只今參りしが先達て眺へ置いた石塔が出
來ましたら。彼地へ建て、貰ひたさ。先づ御亭主に逢ひましたい。イヤとゞ様は只今留守でござりますが。お前がお
出でなされたら待たせまして置く様にとナアお岩。アイ申付けて出られました。歸られます迄名代は此娘御。お咄の

相手にしてうつゝ答へつやつ返しつ。地とかくお心安うして進せて下さりませ。サア〜奥へとフシすゝれば。固然らば左様致さんと。地の心もつい立つて。一間へ通る後かげ見送るお岩が手を打つて。詞テモ扱も好い器量。あの様なお若衆は日本國を尋ねても今一人と有るまい。惣ざしやんすも道理々々。したがコレ小雪様うろ付いてござる所ぢやない。ちやつといて教へた通り何かなしにあたまから抱付いてこけたがえいぞや。夫も上へならぬやう下から随分あしらひなされ。地アレまだうぢかはもどかしやサア〜早うとむりやりに。押しやり突きやり跡びつしやり。詞ア、世話やのどうやらかうやら首尾なつた。地是から休もと儘なれどたつた一重の壁ごしに。隣の餅搗聞くやうで寝られそむない夜さりぢやと。フシひつゝ勝手へ入る跡へ。地小雪は立出で興さめ顔。詞テモめんえうなお若衆様。慥かに奥へいかしやんしたが。かいくれ姿が見えぬはどうぢや。地不思議〜とうろ〜きよろ〜尋ねる内。こなたの障子さつと明け。詞イヤ爰に居ますわいの。是はしたり意地の悪いいつの間に抜けなかつた。人の思ふ様にもない心つよいお方ぢやと。地言ひつゝ傍へ指寄れば飛びしやつてア、これ〜。詞始終の様子を見聞くに付け。優しき人の志。嬉しいとは言ひながら。我が身は深き様子有つて假にも妹背の語らひをなす事叶はず。地縁なき事は前生の。約束ならめと諦めて思ひ切つて下されと。いふもさすがに氣の毒の。フシ打しをれたる其風情。地小雪ははつと力を落し。サハリたとへ様子があるとても。是程に思ひ詰め心を盡すかひもなく。情なうも振捨てゝいやとおつしやりや生きては居ぬ。むごいつれないお心と。ステ恨み歎けば。詞いやとよ恨むはさる事ながら。逢ふは別れの始といふ例に洩れぬ我が身の上。頼み置きたる石塔が今にも成就してあらば。再び此家へ來らぬ故逢見る事も叶ふまじ。地只儘ならぬは世の習ひはかなき物は人の身の。一生は皆夢と思へばさのみ迷ひも有るまじ。さりながら今を限りの別れといへば。誰しも名殘惜しい物。若しも戀しき折からは。詞心のいさめともならん。いで〜形見を參らせんと。地錦の袋押開き青葉さかえし笛竹を。渡す心もあぢきなく戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく。ひよ

んな事ぢやといふより外フシ詞も。涙にくれぬたる。地折から道々口癖に南無阿彌陀。なむあみだ六逮夜よりいきせき戻り門の戸を。明けい〜と打叩けば。あいと奥から返事してお岩がかけて出で。詞且那樣のお歸りさうなコレ小雪様。折角戀になされたあなたを。此儘で思ひ切るお前の心がいかにしてもいとしばい。地せめてもの心ゆかし此間にちやつと抱付きなされと。むりに押遣り庭に下り戸口を明け。詞ホウ且那樣早かつた。何の早かる。百萬べん〜だら〜と跡の話で途方もなう夜が更けた。アなむあみだ〜。ヤお若衆はござつたか。サア其お方は。どうぢや〜。サ、さつきに見えたけれど。恥しかったか門口でうぢかは〜はいりにくさうにして有つたを。もどかしがつて娘御がついはいらしなされたわいな。ヤ、何ぢや娘がもうはいらしたか。アイ。なむあみだ〜。ヲ、且那樣とした事が悪い聞きやう。此門口にござつたを内へはいらしなされたといふこつちやわいな。ハテさうしつかりといへばえいにどうやら紛はしかつたではつと思つた。地どりやお目にかゝるかとずつと通つて是は〜。詞さぞお待遠にござりましよ。扱お誂への石塔。今日の約束なりや夜を日に次いで漸う出来し。今朝から若い者等に運ばせたが。大かた建てたでござりましよ。それは嬉しやいかい世話でござつた。イヤ世話は家業ぢやがお氣に入つたらこちも仕合。マア御らうじて下さりませ。成程々々同道して參りたい。そんならお供致しましよと。地立つて用意を取急げば。詞コレ〜と〜様わしも一所に行きたいわいな。そりや何で。ハテ石塔の恰好見に。ハテ扱わけもない何のわれが見る事で。爰やあその所ぢやなし殊に夜道ぢや。阿呆いはずと背戸門しめてよう留守せい。コリヤお岩。そちも傍から随分氣を付け誰が來うとも構へてついはいらすなよ。合點か。地サア〜お出と打連れ立ち急ぎてこそは、出でて行く。ハルハシ月もさやけき夜もすがら。四方の景色もすみのぼる。光りを覆ふ雲ならで。雀のやどり影暗き。本フシ松の林に風あれて。汀の波のおのづから音もはげしくフシ打寄せて。地高根に響く。コハリ山彦は。とう〜さつと布引の。ナホス瀧の。しら糸たえずと人の。とへばかなたと五百崎に。オクリつゞく。藪池村里も。急ぎて切利天上寺。摩耶のお

山を馬手に見て。行く道筋も直ならぬ脇の濱邊や磯傳ひ。神戸も跡に湊川。ハルフシ流るゝ水の淀ならば爰も繼橋かけ渡すフシ舟を守りの神垣や。地森もしげみて置く露の。垂水の里も早過ぎて行けば。程なく上野山フシ一の谷にぞ着きけるが。地東雲近き横雲のたなびく空も青々と。枝葉しげりし松蔭につつくり立つた御影石。遠目にそれと彌陀六が。走寄つて是ぢや〜。調先達て遣はされた所書に合せ。若い者等に言付けたりや建ては建てたがちつくり笠にふりがあると。地押直してためつすがめつ。調サア恰好見て下さりませ。何とようござりませうがや。是から狂ひのない様に腰を合はすは漆喰と。地懷より蓋物取出し。重ねの際々塗る所へ。山畑かせく百姓ども。鋤鎌かたげどや〜と通りかゝつて。調ホウ石屋の親仁殿か。おいやいこりや皆とうから精が出るな。イヤこちとらより此方がとうからあぢな所へ石塔を建てさしやつたの。ハテあの人は商賣ぢやによつて。どこて有らうが持運んで建てねばならぬが。誑人が希有なやつぢやの。ア、これ〜むさと魚相言ふまい。其施主人が爰にござるぞナアお若衆様。我も人も亡者の爲卒都婆一枚立て〜も三惡道を通る〜といふまして大層な此石塔をお建てなさるは御奇特なお若衆様。結構なお志でござります。イヤこれ親仁殿。お若衆の施主人のと人もないにそりや何いはしやる。何とはわいら目が覺めぬな。アレまたどこに人がゐるぞいの。ハテこれ爰にハアほんに見えぬわ。ハレめんえうなたつた今迄爰にて有つたが。ハアどつちへござつたな。お若衆様〜と。地呼べば俱々百姓ども。爰かそこかと尋ぬる所へ。娘の小雪がかはだし息もすたすたフシ走り着き。調お若衆様にたつた一言いひたい事が有つてきた。地ちよつと逢はして下さりませ。調イヤ逢はして所ぢやない影も形も見えぬわい。コレ親父殿。お若衆がゐやらねば忽ち此方の損ぢやぞや。所を知つてか。但し先銀でも取つて置かしやつたか。いやてや。仁體が好いから所も問はず一錢も受取らなんだ。ハア夫てよめた。石塔をかこ付に何ぞせしめる下工。扱は騙に極つた。調遠くはうせまいぼつかけんサア皆こい〜と立騒げば。調イヤこれこれ待たしやんせ。よもやそんなさもしい心なお方ではあるまい。其證據はわしにやると。コレ此箇を。貰うたのか。

ハアどれ〜。ヤこりやまあ袋が結構な赤金欄ぢや。扱笛は生竹でもないが節からちつくり枝葉がある。いか様是を錢にせうなら百が物はあらうかいナウ親仁殿。ハテ扱何の錢にならう夫も娘が一杯喰たのぢや。エ、こんな事ならあたまで半銀取つて置いたら。まんざらの損もせまいにあた慘たらしい目にあうたと。文地悔むにかひもあら笑止や。彌陀六がぬかれたと傳へて諸事の誂物。手附を取るといふ事はフシ此時。よりと知られたり。ナホス地時しも跡の松原より足早にくる女子は。何者成るといふ中に走り。近付き藤の局。詞コレ〜ちよつと物問はう。船寺はどつちぢやの。地教へてたもとありければ。詞ハア、夫は是からよつ程遠いが。見れば賤しうない女中の。たつた一人かちはだして何故寺を尋ねさつしやる。されば妾は様子有つて跡より追手のかゝる者。暫く影を隠さん爲と。地宜ふ中に目早くも娘が持つたる袋を見付け。詞なうそれちよつと見せてたべと。地手に取給へば紛ひなき胥葉の一管。詞ヤア是は我が子の敦盛が肌身放なさぬ秘藏の笛。どうして此方の手にあると。地聞いて親子も不審顔。百姓ども口々に。詞其敦盛といふ人は。此間の戦に。源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝり。死なしやつたぢやないかいナア與次郎。ヲ、其時にいちらしい玉織とやらいふ内裏上臈も殺されて居たげなと。地聞いて御臺は。詞ヤア〜〜に敦盛は討たれしとや。福原の館にて母様御無事でおさらばと玉織諸共いさぎよう。地いうたが此世の暇乞。長い別れに成つたかと。ありし事どもくどき立て。人目も恥ぢぬ叫び泣き前後。不覺に見えにける。詞イヤこれ親仁殿。合點のいかぬ事がある。死なしやつた敦盛様があゝの笛の主なれば。こなたに石塔誂へたお若衆と一つぢやないか。いかにも。サ其死んだ人が來さうなものぢやないぞや。いかにも。ハ、ア聞えた。さつきに爰迄立つて來て。あゝ物のいふ中撤消す様に見えなんだは。扱は幽霊であつたよなと。地いへば皆々興さめ顔御臺は猶も悲しさの。ステ思ひやます御歎き。小雪も始終を聞くにつけ。儂い事やとばかりにて。フシ俱に袂をしぼりける。地折ふし遙の松蔭よりむら〜鳥の搏つが如くかけくる大勢彌陀六が。あれこそ髓に追手の者。先づ〜あなたを隠すに幸ひ。此石塔の後へとフシ御臺の手

を取り忍ばせて。詞何と思やるいづれも。追手の奴等が此所をすなほに通ればあなたの仕合。若しも何かと意地張らば。是迄平家の領地に住んだ御恩の爲。一働せうぢやないか。ヲ、サてん手に鋤鋤の。背打くらはせほひまくと。地いふ間もあらせず砂煙蹴立て踏立てかけくるは。梶原が郎等番場の忠太須股運平先として。數多引連れつと寄り。詞コリヤく百姓ども。三十餘りの女一人此所へきたであらう。どつちへ逃げたそれをぬかせ。ハア成程々々。其女はアレ。あの道を横切に。濱邊傳ひに走つたがア、もう二三里も行きませう。追手の衆なら一足も。地早うござれとフシ急すれば。地扱こそ遁すな皆来いと。駈出すふりにて立留り。運平が耳に口。喋し合せて木蔭に残しフシ濱邊をさしてかけり行く。地跡打眺めサア樂ぢや。此間に早うと御臺を出し。詞コリヤく娘。あなた一人は覺束ない。寺迄送つて内へいね。地ちやつとくといふ所へ。思ひがけなき木蔭より須股運平飛んで出て。詞ヤアどこへくかうあらうと推量し。忠太が我を残し置かれた。サ、早う御臺を渡せ。邪魔ひろぐとかたつばし。そつ首ころり打落す何とく罵れば。地百姓共せうら笑ひ。地コリヤやい。そつ首のそつくひのと。わいらがほでの動く間にうつかりとして居ようかい。サア相手仕事ぢや手早にこいと。地てん手に鋤鋤熊手。打つてかゝれば運平始め。數多の家來も一同にフシ拔連れく渡り合ひ。地打合ふ隙に彌陀六が。ソレ御臺様逃げた。娘も逃げよとあせる中。元來達者の百姓ども。腕先揃へて連柳打。かたはし家來を打殿り。運平を追取捲き。詞投げたり踏んだり蹴飛したり寄つてかゝつて打叩く。地急所にや當りけんフシうんと仰向に反返れば。地ソリヤ死んだはと逃行く家來。又追つかくるを彌陀六が。コレく待つたと呼返し。詞御臺の難儀を救ふ爲。ぼつ散らす計りでよいにア、死んだりや尻がむつかしい。コリヤまあどうした物である。どうといふたら逃げたがよいサア皆ござれといふ所へ。地駈つて来る庄屋の孫作死骸見付けて扱こそく。詞一人も散らす事ならぬぞや。コレ皆よう聞きやれ。今梶原様の郎等番場の忠太といふお侍がござつて。百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由憎いやつ。残らず引立て來るべしと厳しい言付。ア、ひよんな事して

おらに迄厄介をかける。遅なはつたら猶こはい。サア〜 地おぢやといふに皆々尻込の。中に彌陀六進み寄り。

誦殺したと聞かしたつたは大きな間違ひ。ありや目が眩うて死んだのぢや。其證據にはソレ。死骸に一つも疵がない。

ムウそれが定ならおらも嬉しい。地下レ〜と身體を改め。詞ほんにどこにも疵はない。こりやあつちのが大きな龜

相。ハテそち達が殺さぬからは何のこはい事はない。此中でよう物いふ者たつた一人居て。さつばりと言譯すりや濟

む事ぢや。ほんにさうぢやハア誰がよかるなア。いやこれ年の功ぢや彌陀六いかしやれ。イヤ行く分は構はぬがおり

や口癖の念佛が邪魔に成つてどうもならぬ。そんなら此庄屋が指圖せう。日頃ちよびくさようしやべる雀の忠吉やら

うかい。イヤわしやあんまり口早て何のこつちや譯が知れまい。扱はびしやの五太右衛門かい。おりや聲が鼻へ入る

ぞ。というて丹兵衛は咽がごろつく。與次郎は齒脱なり。指詰又平おいきやれ。イ、いやコ、こちやド、どもりますわ

いの。ハテ扱其様に讓合つては埒が明かぬ。幸ひ爰に石を運んだ繩がある是で圍取したらよかる。ヲ、そりやいやお

ういはさぬやう此庄屋がしてくると。フシ手早に繩切り後でもちやくちやひん握り。詞コリヤ結んだのを取つた者が

いくのぢやぞ。サアとれいもよ。ヲツト市噪どれとりやる西國廻つて是々と地てん手に繩先引つれば。詞ハア、頭

數よんでしたゴリヤ一筋餘つたわ。ハテそりや親の繩ぢや庄屋殿とらしやれ。ほんにさうぢやおれが取ろ。サア引

け〜かたはしからいなしてくりよ。ヤすつとせい。〜。ハア悲しや結んだのはおれぢやあつた。サア庄屋殿いか

しやれ〜。イヤ待てよ。おりやいかう筈がない。此場の様子を知つてゐるわいらが言譯する筈ぢや。デモ圖が當つ

たもの。そんならも一度。イヤ仕直しはならぬ〜無理いはずといかしやれと。地寄つてかゝつて引立てて押立て。

詞ヨイハサツサ。是は迷惑。ヨイヤサツサ。待つてくれんか。ヨイヤサツサ。了簡ならぬか。ヨイヤサツサ。あんま

りどうよく。ヨイヤサツサ。おつ立てひつ立て。ヨイヤサツサ。地て。ヨイヤサツサ。こ。ヨイヤサツサ。そ。三重八行

空も。地いつかは牙えん須磨の月。ステテ平家は八島の浪に漂ひ。ギンオクリ源氏は。花の盛を見る中に勝れて熊谷

が。陣所は須磨に一構。フシ要害厳しき。逆茂木の中に若木の花盛。八重九重も及びなき。それからあらぬか人毎に。フシ熊谷櫻といふぞかし。地花折らせじとの制札を讀んで行く人讀めぬ人。一つ所に立集り。詞さても咲いたりく。花より見事な此制札。辨慶殿の筆ぢやげな。扱も見事一つも讀めぬ。ヲ、あれはの。義経様が此花を惜み。一枝切らば指一本切るべしとの法度書。ヤア花の代りに指切るとは。首切る下地ヲ、こはや。地見てゐる中も虎の尾を踏む心地する皆ござれと。花に風の臆病風フシちりくこそ別れ行く。ハルフシはるくくと。地尋ねて爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿。陣屋の軒を爰やかしこと尋ねしが。幕に覺えの家の紋。フシ嬉しや爰と内に入る。地折節家の子堤の軍次立出でて。是はく奥様か。詞ヲ、軍次そなたも息災さうな。ママめでたいく。熊谷殿や小次郎も變る事はないかの。早う逢ひたい逢はせてたも。ハイ旦那は今日御廟參。小次郎様は先頃より御前勤めて御下りなし。地ママく長の御旅路お疲れをお休めと。フシ挨拶とりくなる所へ。地敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れ來て。こけつ轉びつ花の蔭。陣屋をめぐり走着き。詞跡より追手のかゝる者影を隠して給はれと。地險しき體に驚きて相模は傍へ走寄り。見るに見かはす互の顔。詞ヤアお前は藤のお局様ではないか。さういやるそなたは相模ぢやないか。テモ久しやなつかしや。地おゆかし様やと手を取つてママこなたへと伴ひ入る。親しき體に心を利かし。フシ軍次は勝手へ入りにけり。地相模はやがて手をつかへ。詞誠に一昔は夢と申すが。大内に御座遊ばす時。勤番の武士佐竹次郎殿と馴初め。御所を拔出で東へ下り。お前様のお身の上を承れば。御懐胎のお身ながら平家の御家門。參議經盛様方へ縁づき給ふとの噂。其折は世盛の平家。御威勢は益々と陰ながら悦びましたに。此度源平の戦ひ。御一門も散々と聞くに付け。ア、此藤の方様は何となされたどう遊ばしたと。一人苦にしてをりましたに。ママ御機嫌なお顔を見て。おめでたやお嬉しや。ヲ、そなたも無事でママ嬉しい。懐胎で出やつた時の子は姫ごぜか男か。息災で育つて居るか。地ちよつと寄つても女子同士問うつ問はれつ年月に。積る言の葉繰返しフシ嬉し涙の種ぞかし。地藤の方

ぐみ世の盛衰は是非もなや。詞其時に差落したは。無官の太夫敦盛とて。器量發明揃うた子を。今度の軍に討死させ。地夫は八島の波に漂ひ。我のみ残る憂き難儀淺まし身のの上とかこち給へば。詞お道理。以前の御恩もあり。連合にも語りお身の片付後世の誉み。お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して。北面同然の武士只今にては武藏國の住人私の黨の旗頭。熊谷次郎直實と人も知つた侍と。地聞くより御臺は。詞ヤア。そなたの連合の佐竹次郎。今では熊谷の次郎といふか。アイ。すりやあの熊谷の次郎はそなたの夫よな。地ハアはつと吐胸のフシ氣をしづめ。詞何と相模。以前大内にて不義顯はれ。佐竹次郎と諸共禁獄させよとの院宣。自らが申宥め御所の御門を。夜の中に落してやつたを覚えてか。アツア其時の御恩。何の忘れませうぞいな。ム、其恩を忘れずば。助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしたても。エ、イそりや又何のお恨みで。サア最前も咄した院の御所のお胤。無官の太夫敦盛をそちが夫。熊谷が討つたわいの。エ、そりやまあ誠でござりまするか。スリヤそなたは何にも知らぬか。サアはるくと東より。今來て今の物語。地聞いて吐胸の誠しからず追付け夫が歸り次第。様子を尋ぬる其間暫くお控へ下されと。詞を盡し理を盡し。フシ宥むる折に表より。詞梶原平次景高所用あつて推參と。呼ばはる聲。ヤア何梶原とや。見付けられては御身の大事。地先づこちへと御臺の手を取りフシ一間へ伴ふ其中に。堤の軍次立出で。詞今日は主人直實志あつて廟參。御用あらば某に仰置かれ下されと。地に鼻付くれば平次景高。何熊谷殿は他行とな。ソレ家來ども。其石屋の親父め引立て來れ。地はつと答へて科もなき白毫の彌陀六を。フシ平次が前に引据ゆれば。詞ヤイなまから親仁め。汝何者に頼まれ。敦盛が石塔は建てたやい平家は残らず西海へぼつくだし。誂ゆべき相手なければ。察する所源氏の二股武士が。頼みしに違ひはあるまい。サア眞直に白狀ひろげ。僞ると鉛の熱湯。脊骨を割つて流し込むと。地おどしかけても正直一遍。詞テモ扱も御無理な御詮議。先程も申した通り。石塔の誂人は敦盛の幽靈。五輪の事は扱置き。一厘も手附は取らず。建つると其儘石塔の喰込。せめて人魂でも手附に取つたら。小提燈の代りに

致しませうに。冥土へ書出はやられず。本の是が損しやう菩提。地有りやうの申上げ願以此功德施一切。此通りでござりまするとフシ取じめなき。詞ア、何おつしやつても糠に釘と。地軍次が詞に平次は悪智恵。地大かた石塔を建てさせたるも合點々々。熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議。先づそやつめを引立て来れと。地一間へ入れれば家来ども。石屋の親父をむりやりにフシ引立て奥へ連れて行く。相模は障子押開き。日も早や西に傾きしに夫の歸りの遅さよと。フシ待つ間程なく。熊谷の次郎直實。花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか。さすがに猛き武士も。スエ物の哀れを今ぞ知る。思ひを胸に立歸り。妻の相模を尻目にかけてフシ座に直れば。地軍次はやがて覆になり。詞先達て平次景高殿。何か詮議の筋ありとて御影の石屋を引連れ御出有り。奥の一間に御待と。委細を述べればムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一献を催し。梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ。ハテ扱何を猶豫すると。地呵りちらされ是非なくも。相模に顔を見合して。オクリ心を。殘し入りにけり。ハルハシ跡見送りて。熊谷は。詞コリヤ女房。其方は爰へ何しに來た。國元出立の節。陣中へは便も無用と。堅く言付け置いたるに。詞を背くといひ。剩へ女の身で陣中へ來る事。地不屈至極の女めと。不興の體に相模はもぢ。其お呵りを存じながら。地どうかかうかと案じるは小次郎が初陣。詞一里いたら様子が知れうか。五里來たら便があるかと。七里歩み十里歩み。百里餘りの道をつい。都迄ホ、ヲ、しんき。地登つて開けば一の谷とやらで今合戦の最中と。とりくの噂ゆゑ子に引かされるは親の因果。御了簡下さりませ。詞マア此小次郎は息災で居ますかと。地問へば熊谷詞を荒らげ。詞戰場へ赴くからは命はなき物。堅固を尋ぬる未練な性根。若し討死したら何とする。地いゝえいな小次郎が初陣に。よき大將と引組んで討死でも致したら。嬉しい事でござんしよと夫の心に隨ひし。健氣な詞に顔色直し。詞ホ、先づ小次郎が手柄といふは。平山の武者所と争ひ拔駆けの高名。軍門に駆入つての働き。手疵少々負うたれども。末代迄家の譽。エ、して其手疵は。急所ではござりませぬか。ソレまだ手疵を悔む顔付。若し急所なら悲しいか。イヤ何のいな。地かすり疵でも負ふ程の働き

は。でかしたと思つて嬉しさの餘りお尋ね。其時お前も小次郎と一所にお出なされたか。詞ホウ危しと見るより軍門に駈入り。小次郎をむりに引立て小脇にひんだき。我が陣屋へ連れ歸り。某は其軍に搦手の大將。無官の大夫敦盛の首取つたりと。地話に扱はと驚く相模。後に聞きある御臺所我が子の敵と在りあふ刀。詞熊谷やらぬと抜く所鎧摺んで。ヤア敵呼ばはり何やつと。地引寄するを女房取付き。詞ア、これく聊爾なされな。あなたは藤の御局様と。地聞いて直實悔りし。ハア思ひがけなき御對面とフシ飛退き敬ひ奉れば。詞コリヤ熊谷。軍の習ひとは言ひながら。年ほも行かぬ若武者を。ようむごたらしう首討つたなア。サア約束ちや相模。助太刀して夫を討たせ。地何とくくと刀追取りせり付け給へば。アイあいく返事も胸に迫りながら。詞エ、これ直實殿。敦盛様は院のお胤と知りながら。どう心得て討たしやんした。地様子であらう其譯をと。いふもせつなきフシうろく涙。詞ア、愚かく。此度の戦ひ敵と目ざすは安徳天皇。夫に隨ふ平家の一門。敦盛は扱置き。誰彼と鎧を削るに用捨がならうか。ナウ藤の御方。戰場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。其日の軍の概略と。敦盛卿を討つたる次第。物語らんと座を構へ。扱も去んぬる六日の夜。早や東雲と明くる頃。一二を争ひ拔取の。平山熊谷討取れと切つて出でたる平家の軍勢。中に一際、フシ勝れし緋威。地さしもの平山あしらひ兼ねフシ濱邊をさして逃出す。詞ハテ健氣なる若武者や。逃ぐる敵に目なかけそ。熊谷是に控へたり。返せ。戻せ。ヲ、イ。おいと。扇を持つて打招けば。地駒の頭を立直し。波の打物二打三打。いでや組まんと馬上ながらむんずと組み。兩馬が間にどうど落ち。詞ヤア、何と其若武者を組敷いてか。されば御顔をよく見奉れば。鐵漿黒々と細眉に。地年はいざよふ我が子の年ばい。定めて二親ましますさん。其歎きはいかばかりと。子を持つたる身の思ひの餘り。上帯取つて引立て塵フシ打拂ひ早や落ち給へ。詞と勧めさしやんしたか。そんなら討奉るお心ではなかつたの。ヲ早や落ち給へと勧めれど。イヤ一旦敵に組敷かれ何面目に存へん。早や首取れよ熊谷。ナニ首取れというたかいの。健氣な事をいうたなう。サア其仰にいと猶。地涙は胸にせき上げ

し。まつ此通りに我が子の小次郎。敵に組まれて命や捨てん。淺ましきは武士の習ひと太刀も。フシ抜兼ねしに。地逃去つたる平山が後の山より聲高く。詞熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは。二心に極りしと呼ばはる聲々。エエ是非もなや。仰置かるゝ事あらば。言傳へ參らせんと申上ぐれば。地御涙をフシうかめ給ひ。地父は波濤へ赴き給ひ。心にかゝるは母人の御事。長地昨日に變る雲井の空定めなき世の中をいかゞ過行き給ふらん。ハルフシ未來の。迷ひ是一つ。地熊谷頼むの御一言。是非に及ばず御首をと。咄す中より藤の局。ナウ左程母をば思ふなら經盛殿の詞に就き。なぜ都へは身を隠さず。一の谷へは向ひしぞ。健氣にしようた其時は。母も俱々悦んで。勸めてやりし可愛やな。覺悟の上も今更に。胸も迫りて悲しやとフシくどき。歎かせ給ふにぞ。地御尤もとは思へども相模は態と聲勵まし。詞イヤ申しお局様。御一門残らず八島の浦へ落行き給ふ。中に一人踏留まり。討死なされた敦盛様。數萬騎に勝れた高名。但し逃げのび身を隠し。人の笑ひを受け給ふが。お前の氣では嬉しいか。地御未練な御卑怯なと諷めに熊谷。詞ヲ、でかしたく。コリヤ女房。御臺所此所に御座あつてはお爲にならぬ。片時も早く何方へも御供せよ。サアく早くいけく。地我も敦盛の御首實檢に供へん。軍次はをらぬか早や參れと。呼ばはる聲と諸共に。オクリ一間へ。こそは入相の。ハルフシ鐘は無常の。時を打つ。陣屋々々の灯火にいとど。悲しさ藤の方。ア、地思ひ出せば不便やな。今はの際迄も肌身放さず持つたるはコレ此青葉の笛。我と我が身の石塔を建て、貰うた價にと。渡し置いた此笛の我が手に入りしも親子の縁。魂魄此世にあるならばなぜ母には見えぬぞ。聞えぬ我が子やなつかしのこの笛やと。肌につけ身に添へてフシ盡せぬ。思ひやるせなき。詞コレ申し其笛がよい形見。經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善。地敦盛様のお聲をば聞かと思つて遊ばせと。ステテすゝめに隨ひ藤の方涙に。しめす歌口も。震うて音をぞ。すましける。合ラシ親子の縁の絆にや。障子に映るかげろふの姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより。ヤレなつかしの我が子やと。かけ寄り給ふを相模は抱留め。詞香の煙に姿を顯はし。實方は死して再び都へ歸りしも。一念

のなす所。あるまい事にはあらねども。訝しき障子の影。殊に親子は一世と申せば。御對面遊ばさば御姿は消失せん。地イヤなう四十九日が其間、魂中有に迷ふと聞く。せめては逢うて一言と振放し、障子ぐわらりと明け給へば。姿は見えず緋威のフシ鎧ばかりぞ残りける。地はつと計りに藤の方。相模も俱に取付いて。扱は鎧の影なるか。戀しと迷ふ心からお姿と見えけるかと。俱にこがれて正體もスエテ泣きくどく。こそ哀れなれ。地時刻移ると次郎直實、フシ首桶携へ立出づれば。地相模は夫の袂を控へ。詞コレ申し是が親子御一生のお別れ。地せめて御首になりとも。御暇乞と願ふにぞ。藤の局も涙ながらナウ熊谷。そちも子のある身でないか。野山の猛き獸さへ子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを辨へて情に一目見せてたもと。縋り歎かせ給へども。詞イヤ實檢に供へぬ中内見は叶はぬと。地はね退け突退け行くフシ所に。詞ヤア熊谷暫し。敦盛の首持參に及ばず。義經是にて見ようずるはと。地一間をさつと押開き立出て給ふ御大將。ハ、ハ、ハ、はつと次郎直實。思ひ寄らねば女房も。藤の局も諸共に呆れながらに平伏す。地義經席に着き給ひ。詞ヤア直實。首實檢延引といひ。軍中にて暇を願ふ。汝が心底訝しく密に來りて最前より。始終の様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首實檢せんと。地仰を聞くより熊谷ははつと答へ走り出て。若木の櫻に立置きし制札引抜き。恐れげなく義經の御前に差置き。詞先つ頃堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊。此熊谷には敦盛の首取れよとて。辨慶執筆の此制札。則ち札の面の如く御誕に任せ。敦盛の首討取つたり。地御實檢下さるべしと監を取れば。ヤア其首はとかけ寄る女房。引寄せて息の根とめ。御臺は我が子と心も空。立寄り給へば首を覆ひ。詞コレ申し。實檢に供へし後は。お目にかける此首。お騒ぎあるなと。地熊谷が。諫めに流石はしたなう。寄るも寄られず悲しさのち々に碎くる物思ひ。地次郎直實謹んで。詞敦盛卿は院の御胤。此花江南の所無は。則ち南面の嫩。一枝をきらば一指を切るべし。花に準へし制札の面。察し申して討つたる此首。御賢慮に叶ひしか。但し直實過りしか御批判いかにと言上す。地義經欣然と實檢ましまし。詞ホ、花を惜む義經が心を察し。アよく

も討つたりな。敦盛に紛れなき其首。ソレ由縁ゆゑの人もあるべし。地見せて名残を惜ませよと。仰を聞くよりコリヤ女房。詞敦盛の御首。藤の方へお目にかけよ。地アイあいとばかり女房は。あへなき首を手に取上げ。見るも涙ふさがりて。變る我が子の死顔に。胸はせき上げ身も顫はれ。持つたる首の揺ぐのを。黠頭えんとうくやうに思はれて。門出の時

に振返りにつと笑うた面ざしが。有ると思へば可愛さ不便さ。聲さへ喉にフシつまらせて。詞申し藤の方様御歎きあつた敦盛様の此首。ヒヤア是は。サイナア申し。是よう御覽遊してお恨み晴らしよい首ぢやと譽めておやりなされて下さりませ。申し此首はな。私がお館やぐらで。能谷殿と忍び逢ひ懐胎みもとながら東へ下り。産落うぶしたはナ。コレナ。此敦盛様。其節お前も御懷胎くわいた。誕生ありし其お子が無官の太夫様。兩方ながらお腹なかに持ち國を隔て、十六年。地音信不通の主従がお役に立つたも因縁かや。せめて最期は潔う死なされたかと怨めしげに。問へど夫は瞬またたも。せん方涙御前を恐れ。餘所にいひなす詞さへ。フシ泣音血なぐねを吐く思ひなり。地藤の局は御聲曇り。ナウ相模。今の今迄我が子ぞと。思ひの外な熊谷の情。そなたは嘸や悲しかろ。地かうした事とは露しらず。敵を取らうの切らうのというた詞が恥しい。我が子の爲には命の親。忝いとフシ手を合せ。地此首の生世なまよの中。逢見ぬ事の悔しやとフシ俱に歎かせ給ひしが。地是に就きいぶかしきは此濱の石塔。敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ。秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り。最前其笛吹いた時あの障子に映うつりし影は髓に我が子と思ひしが。詞も交さず消失せしは。詞アイや其笛の音を聞いてかけ出し敦盛の幽靈。人目ありと引止め。障子ごしの面影は義經が志と。地聞いて御筆は我が子の無事。悟りながらも箒木すきのありとは見えて隔てられフシ又も涙にくれ給ふ。地折節風に誘はれて耳を突抜く法螺貝の音喧すく聞ゆれば。義經は勇み立ちヤア／＼熊谷。詞着到知せの法螺の音出陣の用意々々と。地仰に直實畏り急ぎ一間に入りにけり。地最前より様子を聞居る梶原平次一間の内より躍り出て。詞かくあらんと思ひし故。石屋めを證議に事よせ窺ふ所。義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々。地鎌倉へ注進とフシ言捨てかけ出す後より。はつしと打つたる

手裏劍は。骨を貫く鋼鐵の石鑿うんとはかりに息絶ゆる。スハ何者といふ中に。立出る石屋の親仁。詞ハ、アお前方の邪魔になる。こつばを捨て、上げました。扱幽靈の御講釋。承つて先づ安堵。地もうお暇と立行くをヤア待て親仁。詞コリヤ彌平兵衛宗清待てと。地義經の詞に憐り。はつと思へどそらさぬ顔。詞ハレやれくとつけない。御影の里に隠れない。白毫の彌陀六といふ男でえす。ハ、ハ、ハ、誠や謔にも。至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは。人間一生忘れずといふ。其昔母常磐の懷に抱かれ。伏見の里にて雪に凍えしを。汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ。其時はわれ三歳なれども面影は目先に残り。見覚えある眉間の黒子隠しても隠されまじ。詞重盛平去の後は行方知れずと聞きしが。ハテ堅固で居たな満足やと。地聞くより彌陀六づかくと立寄り。義經の顔穴の明くほど打眺め。詞テモ恐しい眼力ぢやよなア。老子は生れながらに聴く。莊子は三つにして人相を知ると聞きしが。かく彌平兵衛宗清と見られた上は。エ、義經殿。其時こなたを見遁さずは。今平家の楯籠る鐵拐が峰嶋越を攻落す大將はあるまいもの。又池殿と言合せ。頼朝を助けずは平家は今に榮えんもの。エ、宗清が一生の不覺。地是につけても小松殿御臨終の折から。年家の運命未危し。詞汝武門を遁れ身を隠し。一門の跡弔へと。唐土青玉山へ祠堂金と偽り。三千兩の黄金と。忘れ形見の姫君一人預り。御影の里へ身退き。平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑。播州一國那智高野。近國他國に建置きし施主の知れぬ石塔は。皆これ彌平兵衛宗清が。涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔詭に見えし時も。御幼少にて御別れ申せし故。御顔は見覚えねども。心得ぬ風俗は。ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより。心よく受合ひしが。扱は命に代りし小次郎が菩提の爲。此濱の石塔は敦盛の志にてありけるか。へつエ。地いかに天命歸すればとて。我が助けし頼朝義經此兩人の軍配にて。平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハア、是非もなき運命やな。詞平家の爲に獅子身中の蟲とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄。我を恨まん淺ましやと。或は悔み。或は怒り。スエテ涙は。瀧を争へり。元來とき大將義經。詞ヤア、熊谷。障子の内の鏡櫃。ソレ

こなたへ 地はつと答へて次郎直實。出陣の立立と好む所の大荒目鍬形の兜を着し。抱へ出てたる鎧櫃。フシ御目通りに直し置く。詞コリヤ親仁。其方が大切に育つる娘へ。此鎧櫃置けてくれ。よ。コリヤ彌陀六。ヤア彌陀六とは。フウ宗清なれば平家の餘類。源氏の大将が頼むべき筋は。ム、面白い。彌陀六め頼まれて進せましょ。したが娘へは不相應な下され物。マア内は何でござります。改めて見ませうと。地蓋押明くれば敦盛卿。ナウなつかしやと藤の方。かけ寄り給へば蓋びつしやり。詞イヤ此内には何にもない。ヲ、何もないく。ホ、是てちつと蟲が納つた。ナウ直實。貴殿への御禮はコレ。此制札。一枝を伐らば一子を切つて。へツエ 地忝いといふに相模は夫に向ひ。我が子の死んだも忠義と聞けばもう諦めて居ながらも。源平と別れし中。どうしてまあ敦盛様と小次郎を取かへやうが。詞ハテ最前も話した通り。手貞と偽り。無理に小脇にひつばさみ連歸つたが敦盛卿。又平山を追駆け出たを呼返して。首討つたのが小次郎さ。知れた事をと。地鏡なる。話に相模はむせび入りエ、どうよくな熊谷殿。こなた一人の子かいなう。逢はうくと樂んで百里二百里來たものを。とつくりと譯もいはず。詞首討つたのが小次郎さ。地知れた事をと没義道に。叱るばかりが手柄でも。ござんすまいとギンハルシ聲を上げ泣き。くどくこそ道理なれ。地心を汲んで御大将勇みを付けんとかヤア。熊谷。詞西國出陣時移る用意いかにと仰に直實。恐れながら先達で願上げし暇の一件。地かくの通りと兜を取れば。切拂うたる有髪の僧。義経も感心有りホ、さもありません。詞それ武士の高名譽を望むも。子孫に傳へん家の面目。其傳ふべき子を先立て。軍に立たん望は。ホウ尤も。コリヤ熊谷。願に任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ。父義朝や。地母常磐の回向も頼むと親しき御説。ハ、ア有難しと立上り。上帯を引ほとき鎧をぬげば袈裟白無垢。相模是はと取付くを。詞ヤア何驚く女房。大将の御情にて。軍半に願の通り。御暇を賜りし我が本懐。熊谷が向ふは西方彌陀の國。伴小次郎が拔駆けしたる九品蓮臺。一つ蓮の縁を結び。今より我が名も蓮生と改めん。一念彌陀佛即滅無量罪。十六年も一昔。ア夢であつたなあと。地ほろりとこぼす涙の露。松に

鬢く初雪の日影に融ける。フシ風情なり。地ヲ、さうぢや〜。我が子の罪障消滅の加勢は是と切つたる黒髪。詞はな
 くて御大將。藤の局も諸共に。フシ御涙にぞくれ給ふ。地長居は無益と彌陀六は。鎧櫃に連着をフシかけた思案のしめ
 く〜。詞コレ〜。義經殿。若し又敦盛生返り。平家の殘黨かり集め。地恩を仇にて返さばいかに。詞ヲ、それ
 こそは義經や。兄頼朝が助かりて。仇を報いし其ごとく天運次第恨を請けん。げに其時は此熊谷。地浮世を捨て、不
 隨者と。源平兩家に由緒はなし。互に争ふ修羅道の。苦患を助くる回向の役。詞此彌陀六は折を得て。又宗清と心の
 還俗。地我は心も墨染に。黒谷の法然を師と頼み教を請けんいざさらば。詞君にも益々御安泰。フシお暇申すと夫婦
 づれ。石屋は藤の御局を伴ひ出づる陣屋の軒。御縁があらばと女子同士。命があらばと男同士。堅固で暮せの御上意
 に有がた涙名残の涙。又思ひ出す小次郎が。首を手づから御大將。此須磨寺に取納め末世末代敦盛と。其名は朽ちぬ
 黄金札。武藏坊が制札も花を惜めど花よりも。惜む子を捨て武士を捨て。ハルフシカ、リすみ所さへ定めなき有爲轉變
 の世の中やと。互に見合す顔と顔。詞さらば。〜。地おさらばの聲にかきくもりわかれて。こそは出でて行く

第 四 道行花の追風

ハル磯千鳥。いく夜寝ざめ。フシ物あんじ。ハルフシ二世とかねたる。忠度は。はかなく討たれ給ふとも。又鎌倉へ捕は
 れとも。スエ噂とり〜。菊の前。心細布胸あはず。けふ立ちそむる旅衣。小オクリきつ〜。なじみを重ねつる。養ひ君
 とフシかしづきの。装具老女ひとり杖柱。名はありながら呼馴れし。うばらの。里を出てこして。東の空へと。
 ナホス思ひ立つ。フシオクリ心の内こそ。遙なれ足弱づれの。玉銚に。ハルフシ末しら浪の武庫川や。昆陽野の池にすむ
 月も心は。曇る片。袖の其うつり。香も形見かと。思ひぞつもる芥川。いつか伏見も。フシ跡になし。殿御にやがて
 近江路と。長地見え渡りたる風景も心せかれて行く道は爪先上り小石原。老女は足をいたはりて。詞申し〜お姫

様。行先遠き旅の空御身の勞も出やせん。地マア暫くと道芝に立ちやすらへば。フシ菊の前。ヲ、みづからが氣のせ
く儘。跡先見ずに道を急ぎ。年寄つたそなたの難儀。詞足が痛みはせぬかやと。タ、キ互に問うつ問はれつる。親身
なじみの底深き。にはのハズミ浦なみ。山々も茂りし峯は。フシ八王子。磯邊に見ゆる唐崎の松は扇の要とやあれこ
そ。志賀の。フシ山越の。よき詠ぞと教ゆれば菊の前打眺め。詞ナウ志賀の山とはあれなるか。なつかしや忠度様の
御詠歌を。千載集へ父上が撰み入れ給へども。勅勸の御身を憚り讀人しれずと末の世迄。御名を削りし本意なさを。
御歎きの涙にて。スエテ濡れし形見の片袖は。忍びあふ夜の添臥も。冷泉君は。左が。フシ寢勝手に。打着せ給ひし
口ずさみ。面影の霞める月ぞ宿りける。春や昔の袖の涙に。袖の涙やありし夜の。主は雲井に隔たりて。昔語となり
給はゞ。此身の果はいかならんと。フシ歎きに草の露ぞうく。同じ思ひを押し隠し。老女は力つく杖に。オクリ道を。助
けて行先をたぐり寄せなん布引山心も。フシ關の別れより。伊勢や尾張の海面に立つ波を見ていとゞしく。過ぎにし
方は遠ざかり。知らぬ山々里々に。日を重ね夜を重ねほつれし。巻に風いとふ濱松過ぎて。山坂にかゝり鞠子や
フシ沖つ波。富士の煙の立昇り。行方も知らぬ旅人の姫ごせ連と。悪口に。唄君と添寝に燈火よせて。挑げて見れば。
さうだか〜。いとほづかしや。消せばいとお顔が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえいと恥しや。
消せばいとお顔が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえ。ナホスハルフシ無理もわやくも。したがひの夫
に再び大磯と。心ばかりは急がれて足はもつる。藤澤やえにしの便星月夜鎌倉。にこそ。三重ハ着きにけれ
地榮えぬる平家の一門悉く。西海の波に亡び再び榮ゆる源氏の御代。猶長久の御祈願と鶴が岡の八幡宮。新たに造營
ありければ。日々に威を増す神詣。フシ賑はふ空も長閑なる。地向うの方よりのつさ〜供人引連れ醒井兵太。詞ヤア
家来ども。道々もいふ通り主君頼朝公より。平家の餘類は根を斷つて葉を枯らせとの仰によつて。隠れ忍ぶ殘黨を取
縛むる身が役目。地随分四方に眼をくばり。うさんな者と見るならば。男女に限らず搦捕れ。手柄はそち達婆美は某。

急度申渡したとはいく／＼も仰山にフシ社深くぞ入りにける。地跡に社參の一群は徒士の附々も。一際目立つ旅乗物松蔭に昇き据ゑて。詞是は鶴が岡八幡宮と申しまして源氏の御代を守りの御神。御拜がてらに風景も御覽なされて然るべう存じますと。地頭をさぐれば乗物より。武士にはあらぬ風俗は九條の町に全盛を。菅原といふ大夫職。詞是はく今都では口利の牽頭様。喜六様宗助様などというて大概あまい若様達は。水銀なしにてん／＼から／＼。天上さするからくりの名人様達。それを供の侍にしてほんにマア變つた趣向ではないかいなア。かう打揃うて行たらば主はきつい機嫌である。そしてもう六彌太様の屋敷は爰からはつい近いげな。三年ぶりて顔見ようかとわしや飛立つやうに思うてゐるわいなア。いか様是は御尤。此喜六宗助は日頃旦那のお氣に入り。お供をするもお馴染だけ。是からおまへは大名の奥様。訛りちらす女中の中へ。ヲ、辛氣わしやいやいなと今迄のせりふてはマア舞臺つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の内。御一門のお付合などは路考慶子で雲上に萬事そこらはちよんの間てお付合なされませと。地餘所へ通せぬ教の詞知つた同士こそノシすとしけれ。詞そこらはわしが魂膽してゐる。帯の仕様も此形も藏屋敷の振舞てよう見て置いた屋敷の風俗。遁す物ぢやないわいな。おつとよし／＼。それはさうぢやが久しぶりのお寢間の段。御勞の出ぬ様に地黄丸でもあがつて。したが必ず薬酒は御無用と。フシ咄し半へ。地家來引連れ醒井兵太。詞ヤア鎌倉に見馴れぬ女の風俗都者に極つた。地平家の餘類も疑はしいは速歸つて吟味する。ソレ引立ていと立ちかかれば。傍に二人の牽頭はわな／＼。詞都者とは御粹方。したがお尋ねなされます平家とやらかつけとやら微塵も覺えはござりませぬ。ヤア僞るまい／＼。武士に似合ぬがち／＼と震ふは曲者。地ソレ括れと二人を投げ付け蹴飛ばせば。物に馴れたる菅原は。騒がぬ色目しとやかに。詞イヤこれ聊爾さんすなお侍。自らは岡部の六彌太忠澄が女房と。地聞くよりも醒井兵太。詞スリヤお前様には六彌太殿の御内證とな。これはく存せぬ事とて慮外千萬。拙者儀は則ち六彌太殿の下目付。イヤモウ何が物でござります。當時羽利の六彌太殿へかういふ事が聞えては何さ／＼。とにか

く是は家來どもが龜相ハテ不調法千萬と。地眞面目になれば二人の牽頭。詞醒井兵太頭が高い。ハアまちつと高い。ハア／＼と家來も一度に眞倒。額を土にすり付くる。其間に菅原日まぜで知らせ。乗物上げさせ足早にフシ引添うてこそ急ぎ行く。地跡には一度に顔を上げ。是はしたり夢ではないかや。サ夢ぢやによつて醒井兵太。地皆こい／＼と打連れて。オクリ松蔭にこそ走行く。跡へしと／＼二人連れ。小オクリ花や。楓と見し夫の。長地便を何と菊の前詞の林打連れてあてども波のかけ遠きフシ宮居を暫し伏拜み。詞何とマア林此様にうか／＼とさまよふも。地忠度様のお顔が見たさ。須磨の軍の亂れよりどう成りなされた事ぢややら。詞此中は打續き夢見の悪さ。わしやいかう氣にかゝるわいの。お道理／＼。そりや此乳母も同じ事。以前の夫は平家の侍。兄と妹と二人の子の親。様子あつて退去した。かはいげもない夫さへ思ひ出すが女の習ひ。娘は都に勤奉公。兄太五平も軍に出ると言ひましたが。どうなりをつた事ぢややら。地お前も私も思ひ出す事ばかりで。夜がなよつびと泣き暮す長の旅路の御氣休め。ちと床几へと勧められ涙交りの身の上咄。地並木の蔭に誰やらん深編笠の浪人姿。後の方には醒井兵太様子家來ども。ソレ搦めよと追取りまく。林は姫を後にかこひ。詞ヤア聊爾せまいぞ。我々は八幡様へ參詣の者。何故に搦めよとは。ヤアぬかすまい。聞いた所が忠度の妻菊の前。地平家の餘類連れぬ所と林を引退け。姫君に飛掛るをなうコレ待つてととむるを蹴倒し。泣叫ぶ菊の前をひんだかへ。既に危き折からに深編笠の侍が。兵太が利腕ぐつと捻上げ蹴飛ばせばアイタ、夕。詞ヤア爰な編笠め。大切な科人を召捕役目の妨げひろぐ。先づ汝から詮議ある奴。地括れよ叩けと立ちかゝれば。物をもいはず雑兵を宙に擲んで天狗の礫。ばらり／＼と投飛ばせば。命が大事ぢや家來ども。皆こい／＼と言捨ててフシ逸散にこそ逃げて行く。地跡に二人は胸押撫て。詞是は／＼どなたかは存じませぬが。危い所へおかけ故。コレお前もお禮おつしやれと。地姫君俱々嬉し泣き。手を合すれば。詞ア、これ／＼お禮には及ばぬ御禮難儀。シテ承れば女中には忠度殿に縁のある菊の前とな。ア、いや左様ではハテお隠しなされなとつくと様子承つた。おいとしや

忠度卿には早や御果てなされたわいの。エ、そりやほんかシテ〜様子^{ようす}は。地御存じならば聞かしてたべと、フシそゞろ涙のふるひ隠^{かく}。詞ヲ、悔^{くわい}りはお道理〜。さいつ頃須磨の浦の合戦に。岡部の六彌太忠澄に渡り合ひ。右の腕^{うで}を打落され。つひにあへなく御最期と慥に世間の取沙汰^{とくさた}。拙者京都の者なれば兼々和歌の名人と。聞及んだ忠度卿。お咄し申すも他生の縁と。地聞く内よりも姫君は。こは何とせんおいとしゃ。跡に残りて自らは何樂しみに存^{ぞん}へん。南無阿彌陀佛と懐劍にて。自害と見ゆるをなうコレ待つてと。林が宥^なめ止^とめてもイヤ〜〜放^{はな}して殺^{ころ}して情ぢやとフシ止むる。かひもなき叫ぶ。詞イヤサこれ女中。死ぬる命を忠度卿の爲に捨てうと思ふ心はないか。ム、何といはしやんす。過行き給ふ忠度様の爲に此命を捨ていと。どうしたら又お爲になりませうかと。地いふに浪人傍^{わたり}を眺め小聲になり。詞流石は俊成卿の御息女。雲の上人程あつて敵を討たうといふお心が付かぬかと。地言はれて姫君涙を拂^ぬひ。詞ほんにさうぢや悲しいとばかりに心が付いて。夫の修羅^{しゆら}の妄執^{まじしよ}を晴す敵といふは岡部の六彌太。林おぢや。お姫様ござりませと。地逸散^{いつさん}にかけ行くをア、これこれ待つた〜。詞其様にしどけなうてはア、敵討心許^{こころゆる}ない。岡部の六彌太忠澄というては武藏一國の大名なれども。おのれ討たて置かうかと女心の一念力とくと固まりましたかかと。地心探れば二人とも。ほんにさうぢやと懐劍にて互に自身の誓^{ちか}を。切らんとすれば押止め。詞いかにも御心底見えました。未來の夫へ命を捨てて又の夫は重ねぬといふ切髪^{きりかみ}。俱に付添ひ尼法師と様^{さま}を變へても主人の敵討たさうといふ老女の誠ヲウあつばれ見事々々。地縁はなけれど見捨てぬは武士^{ぶし}の情と。矢立取出し鼻紙に。さら〜さつと。フシ書認め。詞コレ此通り。敵の方への入込みやう。御縁あらば重ねて逢はうとフシ立歸れば。地ハアはつと押戴^{おしお}き。イヤこれ申しお前のお名はと問ふ隙も。松吹く風に隔てられ。主従二人點頭^{うづなう}き合ひ立別れてぞ。三重^{さんじゆう}へ急ぎ行く。詞ナント作藏彌嘉内。上方^{かみかた}からけふ奥様がござるといふが。且那六彌太様の奥様か。但しは隠居樂人齋^{うしやく}様の奥様かいなア。こな奴しらないな〜。けふござる奥様といふはな。且那樣が上方でこつてりと談じやつたお色だはい。何お

色とは紅の事ではないかい。イヤこいつ興がる兵つはらではある。色といふはな。都九條で菅原といふお傾城の事だはやい。スリヤあの十文字とやらふんであるく。國太夫節せしの親方殿か。ヲイヤい。旦那六彌太様の奥様になり。けふ此内へぬめり込むのさ。なんとどうまい事ではないか。イヤサ夫またはさうと。合點のいかないは是の隱居様。御子息の六彌太様とは。同年位おなじしの親子の中。おらは新參者で様子は知らないが。ありやマア何たる事だいなア。おらもすつきり合點がいかない。親御様ぢやというてあの様に大事にさつしやるは。若しは旦那の念者ねんぢやではあるまいか。したが念者を見分といふは聞いたが。親分とは斬らしいと。地仇口々の折からに。門前賑はふ遠見の知せ。上方の奥様只今はへ御入りと。いふもとつかは奥よりも待設まちごほの女中方。着連れ打連れ出迎へば。ヒロヒ早や昇入るゝ乗物に牽頭けんとう末社まつちやを供廻り。思付きなる出立いっせだしは。フシ素人しよとめかざる風情なり。地中にも小楨こむらは局役くわやく。しとやかに手をつかへ。詞是はく長ながの御道中御機嫌宜しうおめでたいお國入り。地いざマアお入りと乗物の。戸を明けお手を取りくぐりに。フシかしづかれつ。立出づる姿は武家をやつせども。昔を殘す詞辭。詞是はく皆様いかいお取持。どれがどれやら初はつ々しい。萬事は皆を頼むぞえ。なんと喜六主宗助きろくしゆしゆすけ主と。地いはれてシツシ。詞はてこれ申し。いゝえいなア。わしや聞えぬは六様。久しぶりの女房の顔。ヤレ菅原か久しやくと出さんしさうな所を。昔に變らぬ思はせぶりか。わしや逢うたら一通りきつと一番言はねばならぬと。地長う坐るもフシ日頃の習はせ。地傍そばには手に汗コレシツシにちやつと居直り。詞ほんにマアわしとした事が。始ての付合になめたらしいヲ、笑止と。フシ袖覆そでふさふさへ廓かまどめかし。詞何と皆見やつたか。都女中はわさくと歌舞伎芝居を見る様な風俗。ほんにそれく。いや申し奥様。殿様は今日叶はぬ御用を外へお出てお歸りも追付け。まあ夫迄はお勞休つとれめ。お湯でも召して緩りつと。御祝言の御用意遊ばせ。地皆のお衆は勝手に休息。いざさせ給へと皆々は奥と口とに立別れ。フシ打連れてこそ入りにけれ。地程なく又も知らせの侍。奥方様都より只今お入りと。詞の下より腰元局こし。こりやまあどうぢや。どちらぞが狐ではないか。是非一人は紛れ者に

極つた。詞どうやら奥にござるのが。ヲ、笑止の詞つき尻聲しりやうがなかつた。地化ぢかされまいぞ合點かと。踵かかとを濡らす其隙に。フシ日傘につるゝ入文字。歌梅や。櫻と見ゆれども。散りてかひなき袖の露。ナホスやつせばやつす菊の前。本フシ昔は雲井の月にめてけふは浮身を川竹の。フシ流れに染むるはて衣裝。地林は花車くわぐるまに身をかへて赤前垂の紅も。顔の紅葉と照添あきぞうて餘目よめを包む靡詞なほ。詞コレ申し太夫さん。爰が日頃逢ひたがらんした六様のお屋敷。けふといふけふ天下晴れての奥様遠慮はない。必ず氣をしつかりと持たしやんせと。地言へどしをれし菊の前。スエ我のみ世をばかこち顔。詞別れにし。其日ばかりは廻りめぐきて。又も返らぬ人ぞ戀しきと。地上東門院の女房伊勢ノ大輔おほのすけの歌の心。夕ゆふべの雲朝あしたの雨と誓ひしことも楚王の夢。はかないは浮世あぢきな。此身の上とばかりにてフシ思はず。結ぶ露時雨。詞ア、これ〳〵それはまあ何いはしやんす。あられもない事ばかり。エ、聞えた。昔の勤を隠かくさうと。堂上めかしてヲ、虚言うそ。都九條のお傾城菅原といふ事は。何ぼ隠しても知れてある。皆の女中は都勝り。粹まことの上盛うへもりナア皆さん。宜しう萬事お指圖と。地いふ間あらせず先走りさきまわり。且那お歸り〳〵と。しらせに腰元口を揃へ。詞サアもう樂たのぢや。一時に二人來た嫩御おちびの正體。地本阿彌様にかけたらば。ついくら紛れに探つても。入り付けた門口かどぐちは心覺えがありそな物と。言捨て奥へ入る跡へ。地岡部の六彌太忠澄は威勢も高き廣書院ひろしよん。しづ〳〵歸る廊下口。二人は見るよりヤアあのこなたは。詞きのふ逢うた深編笠ふかひんがしの侍。いか様日外見ひつゑみしりある六彌太殿に似た顔と。地思へど變りし形かたち恰好かつぽう。不思議にあつたが其こなたが。詞いかにも横目の忍び姿。岡部の六彌太忠澄さ。スリヤ願ふ所の夫の敵と。地手早く懐劍突つかくる。二人の利腕りわんしつかと抑へ。詞コリヤサ〳〵。まだ祝言もせぬ中から怪氣諍あやまかひ早い〳〵。ナ合點か。此六彌太を付狙ふ。ナ付けつ廻しつ戀慕こいぼふ。其女房を合點で呼迎へたは互の心底。年月疎遠に打過ぎた。恨もあらう憎からう道理ぢや。ハテサ憎い〳〵は可愛の裏よ。ハ、嬉うれしい〳〵。したが走よほを妾めかけといひ聘めしよを妻つまといふ。婚儀は人の大禮なれば。表立おきてだつて祝言を取結ぶは暮六つ。寢物語は浮世の夢。老女一間に伴ひ用意をし召され。身は大

切な親人へ今日の御機嫌伺ひ。マア夫迄はお行きやれさ。スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意。忠澄殿。忠澄様。待つてをりますぞえ。ハテ扱せく事は無いおいきやれと。地詞の目釘打しめし。心隔ての襖と襖引別れてぞ。三重へ入りにける。フシさを鹿の。地夫待兼ねて菅原は。そろ／＼出づる襖の間は。音も耳なれし廊の歌。唄誠なれども。逢はねばうそよ。しんき心のやるせなや。詞アノ胡弓三味線は御隠居様を諷の御酒宴。ほんに歌の節ではある。何ほ六彌太様の心は變るまいと思つて居れど。三歳隔て逢ふ迄はわしやどうも心が濟まぬ。長地逢うたらどうしてかうしてと案じも同じ菊の前。暮六つ迄もつけしなく。だまして討たん下心忍び出でたる背と背。べつたり行合ひア、こはと飛退く二人が顔じろ／＼。詞ハ、お前はどなたぢやえ。ハイわしは私ぢやが。マアさうおつしやるお前はどなたぢやえと。地問ひかけられて菊の前。詞わしはアノ慮外ながら。岡部の六彌太が奥様。都九條の菅原といふしやの果てござんすと。地聞いて菅原ホ、こりやをかしい。詞其菅原といふ傾城の御本家様をとらまへて。菅原といふしやの果ぢやとはテモきつい間違ひやう。ム、腰元衆か但し又家中衆のお内儀様か。近付に成りましたよと。地上から出れば菊の前。詞イヤ／＼和歌三神を證據其菅原はわしぢやわいな。イヤおれが事ぢや。イヤ／＼わしぢや／＼と。地聞いて菅原呆れ果て。詞コリヤまあ何のこつちや。ム、ウ聞えた扱は大事の夫を吸取らうとする。颯の様な女ぢやな。そしてまああた憎てらしいあの美しい器量わいの。サア／＼こりやもう氣疎い肝積が發つてきたわいな。ム、よいよい。互にいうては水掛論。深い浅いは夫が證據。たとへ年號は變るとも。いかな／＼變らぬ中。直々逢うて吟味する。サ、おぢや。地いかうとフシ立上げば。地ヤア／＼兩人待つて／＼と聲かけて。ゆるぎ出でたる此家の隠居名も身の上も樂人齋。焙烙頭巾大袍。左右に胡弓と三味線を。提げ二人を尻目につけ。詞ア、紛らはしき二人の菅原。詮議の道具は此胡弓と三味線。誠や傾城白拍子は。酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも。まこと傾城菅原に極まれば祝言さするは此親のこうけ。地サア弾け聞かうと褥の上。脇息取つて打凭れ。詞サア兩人。ハテしぶとい。地何

隙どると手詰の場所。詞ヤア〜親人。音曲おんきょくお聞きなざるゝに及ばず。其一人にんの紛れ者引出してお目にかけん。地立出づる六彌太を取つて引寄せ。詞ヤア小ざかしい。親をもどく不孝者見るもなか〜いま〜しいと。地脇息取つて續け打ち。なうコレ待つてと菅原と俱に驚く菊の前。わなゝきふるへば六彌太が。袴はかまがみ取つて引寄する。共に若木の親子の中様子有りげに見えにける。詞サア彈け女。ヤアきよろ〜と何うちつくと。地せんかたも。涙片手に連弾つれびきの。スエテ心々や變るらん。唄身をすつる。里あればこそ浮む瀬の。あるを頼たのみに。うき勤。詞ヤアもうよい彈くな。詮議は濟んだ。九條の町の傾城菅原といふは。地此女に極つたと思ひがけなき菊の前。詞アイ〜お前はきつい調子聞き。とても事に祝言をと。地いそ〜すれば氣遣ひすな。詞モウ暮六つに程もあるまい。勝手へ入つて用意用意。ア、忝かたじけなくいコレこちの人必ず詞違ちがひへまいと。地敵討たうの氣は張弓ア、これ〜と菅原が。とむるもよそに走入る。やらじと駈入る菅原を引止めて樂人齋。詞我上方にありし時。見ぬ戀風にあこがれし。九條の里の傾城菅原。けふといふけふめぐり逢ふも不思議の因縁。伴六彌太。此女に暇いとまをやれ。エ、それは。夫はとは得心せぬか。サア〜〜どうぢやと。地せり詰められて返答もフシ呆れ果てゝぞ見えにける。詞イヤこれそこな若い親仁様おんじん。こなさんはこなさんは〜。あちらをほんの菅原ぢやというて。今又私を菅原ぢやの。イヤ見ぬ戀に風ひはたのと。がつくりそつくりな物の言ひやう。若し又六彌太様さまが去らんとしたらどうせうと思はんす。ヲ、女房にして抱いてねる。エ、ムム、今與へやつたはな。ありや薩摩守忠度ちかたけが言交いひかした菊の前さ。伴六彌太は夫の敵。祝言といふは偽り。女に涙脆なみだもろい悴せまのうんつく。敵を討たれるアリヤ約束じやわいと。地聞くより菅原狂氣の如く。詞そんならあの今の女中様おんなさまに命をやつて。此わしとはどの命で添はしやんす。海山越えてはる〜と。添ひにきた女房の。地身にもなつて見たがよい。餘りの事に涙さへ胸むねに冰こつて出ぬわいなと叩く疊たたみのフシいひがひなき。詞ヤアとても命のねぐさつた六彌太。連添ついでうてもいんまに若後家。卿おんがに歎なげきをかけるも不便。コリヤ子より達者な此親父。思込おもひこんだる戀の意地。おうといは

うがいふまいがけふの今から身が女房。おうといへやい。親孝行ぢや。ヤイ悴。きり／＼暇の状をかけ。地ハルフシ子は三界の首械とは。今身の上知られたと。傍若無人の横車。フシ持餘してぞ見えにける。地菅原涙打拂ひはんにさうぢや。詞よその女に見かへる夫。心中立てるは大きな愚痴。そんならおれに隨ふか。ヲ、隨ふ段か帯解いて寢て。地花やろと立寄るふり。そばなる刀拔打に切つてかゝるをかいぐり。ヤアこりやちよございなほでてんがうと跳飛せば。透間なく又切りかくるを眞の當うんとばかりに倒るれば。六彌太透さず取つて投げ。注連を飾りし箱よりも陣笠鏝引出せば。見るよりハツト樂人齋。ひるむ所をはつたとねめ付け。陣笠鏝兩手に捧げ。詞なんとおやぢ。此二種の笠鏝。覚えがあらう見知りつらん。誠や故人の詞にも。用ひられる時は鼠も虎となるといふわ。まだも能ある人の身の上。こな天命知らずの匹夫め。今改めていふにはあらねど。女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ。もとこなやつは六彌太が旗持の難兵。所存あつて此如く。親と敬ひ尊敬すれば。分量もなき兼ての我儘。あまつさへ我が女房に無體の戀慕。無法非道の人畜め。わるく動かば五體を八つ裂。サアひとつても動いて見よと。地鏝を以てさん／＼に打れよ碎けと打ちなやせば。頭巾はぬけて撥髮奴。フシ興の。醒めたる風情なり。地恥を恥とも思はぬ強悪。詞ヤイこな六彌太の恩知らずめ。今鎌倉で岡部の六彌太といはれて。榮花に暮すは誰様が蔭ぢやぞやい。わりやをめ／＼と忠度に組敷かれたを忘れたな。其時に此郎等。右の腕を切落さずば。コリヤ此首はあるまいがな。いはど手柄は此奴。よいわ是からばれ次手。鎌倉殿の御所へいて。六彌太が高名は。此鼻がさしましたと。注進の上武藏一國我が手に入れるが意趣晴し。待つてをれべら坊めと。地駈行く所を菅原がさうはさせぬと切付くる。六彌太は只たばこの烟騒がぬ太五平菅原を膝の下にしつかとねぢ付け。詞コリヤまつ此如く薩摩守忠度が。あの六彌太を下に組敷き。首をかゝんとせし所。地一間をかけ出て菊の前かう切つたかと太五平が。フシ右の腕を打落し。詞敵といふは六彌太殿と思ひの外。誠の敵は此太五平。夫の恨を止めの刀。地思ひしれと立寄り給へば。ヤアこれ今暫く待つてたべ

と。起上る太五平は。手負に屈せぬ強氣の面色。詞ア、忝い／＼姫君。此奴が念が屈いて。よう切つて下さりましたの。コリヤ妹初霜と。聞いて悔り菅原は。ムウ初霜といふは私が雅名夫を知つたことな様はと。地間はれて太五平涙をうかめ。詞ヲ、かうばかりいうては合點の行かぬは尤も。おりや幼い時に別れた。わが兄の兵之助ぢやわやいと。地聞くにいよく不思議はれず。詞ム、其又現在兄様が此妹に惚れたといひ。そして何ぢや姫君様。よう切つて下さつたと。覺悟の様子は合點がいかぬ。ヲ、疑はしいは尤も。今更語るも涙の種。地姫君様も聞いてたべ。詞もと我が親は。ヲ、其譯は此六彌太が推量に違はず。汝が親は平家の大将。三位中將重衡の家臣。臆病者の名を取りし。後藤兵衛守長であらうがなと。地聞いて太五平ハ、はつと仰天。詞ア扱々驚き入つたる忠澄殿の明察。地草にも心置く露の。宿り定めぬ我が生立。御存じられし様子はいかに。詞ヲ、それ誰かある。細付ひけと詞の下。地思ひがけなき乳母の林。見るめいぶせき細目の恥。妹は見るよりナウ母様がおなつかしやと走り。此マア細目は何故と姫もヌエ手負も驚けば。詞イヤ始終の様子一通り六彌太が言聞かさん。菊の前もお聞きあれ。先つ頃出陣の折から。御身の父上俊成卿より密の内意。和歌の弟子たる忠度は。一方ならぬ縁もあれば。くれん／＼頼むと餘儀なき仰。所に源平生田の合戦。向ふ敵と渡合ひ互に。馬を乗放し念なう下に組敷きしが。面ざし見知りある忠度卿。扱こそ俊成卿の御頼は爰ぞと心得。助けんと思ひながらも名ある敵。いかゞはせんとためらふ中。力勝りの忠度卿に。はね返されて此六彌太。地組敷かれしを下郎の汝。思ひがけなく後より。右の腕を切りし故。フシいたはるかひも涙ながら。地御首討つておこがましよう。武門の數に列る中。詞合點のいかぬは汝が胸中。忠度卿に打ちかけしは紛ひもなき源氏方。夫には違ひ詞の端々。源氏をさみする面魂。ハテ心得ずと思ふより。兼て見置きし此頭巾。裏に正しく書付けしは。三位中將重衡の戒名。朝夕戴く心の底。扱こそしれ者手放されずと。思ひ付いたる恩ごかし。親と敬ひ是迄に心を付けしは其方が。謀叛を抑ゆる情の獄屋。今日はへ兩人をそびき入れしは。汝が素性責めさいなんて尋ねんため。所に思は

ず其方が。己と名のるはこりや下郎の猿智恵。地なんと思ひ知つたかと。始終を聞いて太五平は、スエテ肌骨を貫く吐息の炎ヒキ。フシ母は涙の顔を上げ。調後藤兵衛守長殿に連添ひ有りしは二十年はと以前。七つと三つのあの子供を。付けて離別の憂き難儀。妹が乳にて漸やうと俊成卿へ乳母奉公。妹は傾城あの兄は。有るにあらぬわんぱく太郎。侍の子というたらば。猶我儘が募らうかと。勘當して置く中に。いつぞや太五平我が内へ刀を盗みに入つたを。見付けて聞けば軍に出ると。いふこそ幸ひ高名して。侍の名を顯はせよと。家の系圖を折紙と。刀に添へてやつたるが。却つて害に地ハルフシなつたよな。調ヲ、いかにも貰ひし其系圖。開いて見れば我が親は。後藤兵衛守長ア、恥しからぬ平家の侍。おのれ何でも源氏に紛れ込み。雜兵となり裏切し。親守長に對面せんと。勇みに勇む一の谷。後藤兵衛守長は。主君中將重衡をふり捨て逃けたりし。臆病者畜生武士と軍中の取沙汰と。なむ三寶我が親は。不覺の悪名取りしかと。地胸に磐石いし。五臟いしに石火矢や。なんばう無念にありけるが。よし／＼源氏の侍の首取つて高名し親子の恥を雪がんと。心を碎く生田の戰場。夕暮空のほのぐらく浪打際にひつ組んで。調上になつたは髓に貴殿。シテ六彌太殿と思ふより。右の腕を只一討。よく／＼見ればこはいかに。薩摩守忠度卿。ア、しなしたりな。よし其場にて腹切らんと思ひしかど。イヤ／＼忠義を顯はす時節もと。味方顔にて御首を。やみ／＼こなたに討たしたる。地無念といふも我が誤り。かく氣取られし上からは。我が一分の我を立てよも。とても詮なき平家の御運。せめては入らざる此命姫君に討たれんと。殺されに出た手柄話。調エ、おでかしたなされた姫君様。忠度卿の右の腕。切つた刀で切らるよも。此世の因果をはたす道理。地思へば／＼不運なる我が身の上と悔泣くやみなき扱はと驚くフシ人々の。地中に妹は側そばにある。刀取上げ涙ながら。顔見ぬ父の形見かと。思へばいと胸せまりフシくどき。歎けば太五平は。妹が持つたる拔刀ひきだ。手を持ち添へて右手かての脇腹。ぐつと突込む覺悟の最期。こは／＼いかに何故と親子は心取亂せば。調ア、騒ぐまい／＼と押鎖め。平家方の此兄を。切つたは妹が源氏へ忠義。此一刀ひとの手柄に免じ。申し六彌太殿。必ず見捨ててやつて下さりま

すな。たつた二人の箸折屈はしこりかぶ。わたしやあいつが不便にござる。成人して名は菅原と聞いたを便り。上方へ上つた序に九條の町。なつかしさに逢はうと思へど。身は角介のさびた形なまが。全盛飾る妹が恥と。三筋の町の格子の先きさき。よいよ鹿子様。ヨウつりひ様いさと。ぞめきに紛れて名を問へば。客に揚げられ柏屋の。二階の障子に影法師。三味線取つて投節の。聲を聞いたがコリヤ兄弟の名乗。其時の音色ねいろも聲もあり〜と。おりや耳の底にしみ付いて。今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三味線で。慥に妹と見極めても。平家に縁あるそちなれば。よもや添うては下さるまじと。現在妹に。女房になれの。惚れたのと。心に思はぬ悪道あくどうも。かく計はん心の内。推量してたべ母者人。エ、ついに一日孝行せず。先立つ不孝赦して下され。せめて未來は。勸當いんたう。地々々をと跡いひ兼ねる。いぢらしき母は取分け妹もスエ正體涙に菊の前。我とても恩と情にからまされ。敵さへなき身の上は。兎にも角にも我が夫の。甲斐なき御運とばかりにて見合す四人がとも涙。フシ前後。不覺に見えけるが。地何思ひけん六彌太は林が繩目引ほどき。詞太五平が白狀にて家名知るれば詮議に及ばず。女ながらも敵の餘類。ヤア〜後藤兵衛が妻娘此家に叶はぬ早や出て行けと。地聞いて菅原今更にそりや餘あんまりぢや胴慾ぢやと。いふをも聞かず娘と林をフシ引立て。庭へ突出し。詞女房去つた。ハテこりやナ遣手の付いた傾城菅原敵の娘と聞いては添はれぬ。元の廊へ流し者。付添ひ歩くは遣手の役目。スリヤ此わしは。ヲ、サ兄弟の縁が切るればコリヤ女房。一世の別れの名残を惜めと。地情の詞。ハ、ア盡せぬ御恩とフシ伏拜む。ハルフシ折から拍子木家中の夜廻り。六彌太邊むつたへに心付け。詞コリヤ〜そこな傾城遣手。故郷へ歸る錦の袋ふくろ。地ソレ持つて行けと投出す。二人は立寄り取上げ見れば。詞行暮れて木の下蔭を宿とせば。ヲ、其下しもの句は。花や今宵のあるじならまし。忠度卿の最後の一首。ヤア扱は形見か。地ハアはつと歎き給へば林も俱に。ありし昔を悔泣くみなき。詞ハテ扱これ此六彌太が寸志の情。源氏は今を盛さかりの日の出。平家は暮行く。アレ約束の暮六つ。夜に入れば敵味方のあいるが見えぬ。ソレ早う〜。ハアお志。忘れはせじ。地もうおさらばと立上れば。手負は今ぞ此世の名残。花や今宵のちり櫻。妹一人

親兄の別れを胸に八重櫻。姫は形見の言の葉に結ぶ。心のいと櫻。あとに老木の姥櫻涙の雨や。小夜嵐。生死不定は世の中のふだん櫻といさめてもつきぬ。なごりの。山櫻ちり／＼に。こそ別れゆく

第五

地魏王は彌裂が讒によつて美人の鼻を削がしむるとかや。征夷將軍頼朝公相従ふ大小名。岡部の六彌太忠澄を初めフシ威儀を。正して相詰むる。地頼朝御簾に向はせ給ひ。詞此度の戦に平家の一門西海の浪の泡と消失せし事。全く頼朝が武略にあらず。地是皆神明佛陀の御加護と存じ奉るとフシ卑下の詞も奥床し。地平の時忠勇取直し。詞西國にて源九郎義經平家を悉く討亡し。其虚に乗つて兄頼朝も討取り一天下を併呑せんと某をたばかり。京の君を娶り神璽内侍所を奪ひ。直に鎌倉へ攻入らん由急ぎ告げ知らせん爲來つたり。地屹度征伐然るべしと賢人顔の佞人は、フシいねど夫と知られける。地六彌太聞兼ねつと出で。詞何と言はるゝ時忠卿。義經公に限り左様な御所存少しもなく。腰越迄御出でありしを平山が讒言故鎌倉へも御入れなく。直に御切腹召さるべきを舊臣の輩押し止め。我が君への執成は六彌太が披露承る。夫に御邊が何知つて控へ召されときめ付くれば。地時忠も反打かけフシ互に色立ち見えければ。地頼朝暫しと制し給ひ。詞やをれ六彌太。佞人輩が讒言を用ゆべき我ならず。義經腰越に屯するは鎌倉を頭へさんとの手配ならん。地さすれば弟とて容赦はならず討取つて我が存念を晴すべしと氣色變つて宣へば。時忠は思ふ盡心の内に含む笑。六彌太猶も進み寄り。爾然らば義經公誠の謀叛にもなされよ。三種の神器の内神璽内侍所。此二品は先達て義經公の御手にあり。帝都を守護しましませば則ち官軍。地それに敵たい弓引き給ふは朝敵も同然。武備盛んなる時は却つて其身を害すと申す。此儀いかゞと言上すれば頼朝騒がず。詞ヲ、其儀は某工夫を凝し置きたる事あらんなれ其仔細は。安徳天皇十握の御劔を携へ入水ありしと聞くより早く。都八條大納言兼房卿と申合せ。老松若松と

いふ海士子供を浪間に入れて海底を探させけるに。地龍宮城へ奪ひたる十握の御劍を取返し。兼房卿に差上げしを御所持あつて御下向。頼朝拜諸仕り。此桐が谷へ御新殿をしつらひ將軍の宮と傳き。調即ち此宮より綸旨を乞受け。義經との戦は官軍と官軍のはれ勝負。地幸ひの諸大名一同の出仕をせよとの詞の中。はつと領掌謹んで御劍の宮を携へて。フシ御簾間近く持出づる。地頼朝公恭しく寶劍を取飾り。天顔の恐れありと玉座の御簾。半頃迄巻上ぐれば。フシ各一度に尊敬する。地時忠大口明いてからくと笑ひ。調頼朝は智仁兼備の大將と聞きしに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劍を所持したる者あらば將軍の宮と敬ふかと。地つつと立寄り寶劍取つて打折り。白洲へかつばと投付ければ。是はと皆々仰天敗亡。時忠は緩々と座に直り。調ヤア騒がれを頼朝。あの寶劍は紛れもなき眞赤な贋物。シテ其贋物といふ慥な證據が。ヲ、證據なくて折るべきや。寶劍を所持したる者當宮に立つるとある故。言聞かするよつく聞け。都にて義經某を招き。何とぞ三種の神寶奪取つてくれよとある密の頼み。のつびきならず智略を以て奪取りしかど。呑込めぬ義經が心腹故先づ二色は渡したれども。御寶隨一の寶劍は某が肌身も離さず吃度所持せり。地疑はしくば是見よと懐中より取出せば。邊も輝く十握の御劍。頼朝公を初めとして列座の人々一時に。フシあつと恐れをなしにけり。地頼朝重ねて宣ふは。調今より時忠卿を將軍の宮と仰ぎ奉らん。ヤア諸大名萬歳を唱へられよと。地棟梁の臣の一言にもつてうじられ勝に乗り。調此上は贋宮を引出し面縛させんと。地つつと立寄り御簾引ちぎればコハいかに。思ひがけなき判官義經。寶劍奪取りもんどり打たせ。足下にぐつと踏付け給ひ。調ヤア天命知らずの大納言。安徳天皇寶劍を抱き入水ありしと偽りしを。合點行かずと察するに御邊が奪ひ所持する由。兄頼朝と言合せ様々心を盡したは。此寶劍を奪返さん謀。地サア尋常に細かゝれよと仁心深き義經の。詞にひるまぬ横紙破り無念の顔色齒がみをなし。調エ、たばかられし奇怪千萬。平山と心を合せ。汝等兄弟同士打させ。一天下を一呑と巧みし事も水の泡。地よし。此上は絶體絶命。命限りに切抜けん太刀ひん抜いて切付くる。引つばづして勾欄

より白洲へどうど蹴落し給へば。六彌太すかさず飛びかかり、フシ高小手に縛むすむる。地頼朝心地よげに打守らせ給ひ。調國家を騒がす大罪人刑罰急度糺すべし。地それ計らへと宣ふ所へ。土砂踏散らしあわたゞしき知らせの早打かけ來り。調扱も平山の武者所謀叛の巧み顯れし故。扇が谷やに野陣のぐれを構へ此御殿を追取おつ卷き攻入らんとの催し故。地早速御注進仕ると大息ついて訴ふれば。義經につこと打笑み給ひ。調ヤア、六彌太。扇が谷平山が陣所に馳向ひ。有無をいはさず討取るべしと。地仰は重き兩將の。詞につる、岡部の六彌太いざ打立てや尤と。御前に並居る隨兵まがりひども。我先がけんくと勝色かついろ見せたる八重梅の。花芳はなはしき弓取の。聲も清きよしき軍立ぐんたち扇が谷へと。三重へ急ぎけり。地平山の武者所頼朝兄弟誅罰せんと。扇が谷に陣屋をしつらひ、フシ士卒を隨へ控へひる。地かゝる所へ岡部の六彌太軍兵引具し眞先に大音上げ。調ヤア平山の武者所。汝が惡事顯れし故此所に陣所を構へ。御兄弟へ敵せん由頼朝の仰を蒙り岡部の六彌太向うたり。地手に立つ武士は下合しもあへと、フシ高らかに呼ばはつたり。地かくと聞くより平山末重陣屋より踊出で。調ヤア、岡部の六彌太。此方より馳向ひ討取らんと思ひしに遙々とよううせた。地某が手を下すに及ばすソレ兩人。物ないはせそ討取れと。フシ下知しながらに引返す。地畏つたと醒井番場。無二無三に討つてかゝる。さしつたりと渡合わたあひ持つて開いて眞向かざし。鋭き双の電光石火獅子しし忿迅ふんじん虎亂入。馬手は堅割かたわり弓手は胴切。二人が命は草葉の露。ソレ遁すなと軍兵どもをめいてかゝるを事ともせず。向ふやつばら嫌ひなく。大げさ小げさ車切片端切立てまくり立て。追立てくめつた切り。こりやたまらぬとばらく。跡を慕うて忠澄がフシ遁さじやらじと追うて行く。地さしもの平山途を失ひ馬の鼻を立てかへて。落行かんとせし所へ。岡部の六彌太取つて返し。やらじと尾筒おびづをしつかと取り。調コリヤくくと引戻す。シヤ邪魔ひろくな毛二才め。地そこ立去らずば蹄つひめにかけ胴腹おんはらに風間を明けん。爰を放せと鑿あの鳩胸はとむねあふり打立て鞭打くれ。ハイくくとコハリ乗出せば。どつこいどんへと引留むる。追立て引留めはみ辯。音はちりゝんからころり駒の嘶いな土煙。六彌太奇つて突放せば馬は前立頭轉倒。ころりと落ちる平山

を起しも立てず引伏せ、フシ首引抜かんとせし所へ。地源義經公平大納言を引立てさせしづくと立出で給ひ。詞ホウ手柄々々我兄弟へ敵せんと巧む平山。縛首討ち刑罰糺せよと。仰にはつと六彌太忠澄手早に取纏しつかとかけ。フシ水もたまらず首打落す。地かゝる所へ熊谷入道飛鳥の如くかけ來り。義經公に打向ひ。東へ下る道すがら始終の様子承る。時忠卿は大納言の位有れば私にはなり難し。蓮生法師が出家の役都へ連れ行き禁廷の御差圖を蒙らん。地何とぞ愚僧に御預け下されかしと願へば義經打うなづかせ給ひ。詞ヲ、神妙々々。高位の身なればうかつには殺されず。いかにも和僧が願ひに任せ時忠を預くべし。直に都へ連れ上り院の廳の御沙汰にかけ免もかくも計ふべしと。地仰にはつと蓮生法師時忠を預り申し。莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌。詞極樂にも功の者とや思ふらん。西に向ひて後見せねばと。地詠歌を残り暇乞して歸りける。實に末の世に至りても敵に後を見せぬとは、フシ此理としられたり。地義經御喜悅限りなく。祿を貪る佞人輩を亡せし此上は。三種の神器を守り奉り兄弟打連れ都へ上り。此趣を奏聞せん勇めやかたぐ打立てと。御説に任する岡部の六彌太御立ちざふと呼ばはれば。御供奉の大小名綺羅を飾りて歸洛ある。朝敵亡びの凱歌の聲。太刀は鞘弓は袋と納りて千代榮えぬる源氏。四海太平豊なる國ぞ。久しかりけらし。

寶曆元年辛未天臘月十一日

作者 並木正三

浪岡鯨兒
淺田一鳥

故人 並木宗輔

難波三藏
豊竹甚六

一 谷 嫩 軍 記 終

